第２章

授業実践の研究

――「見方・考え方」を育成するために ――

１　授業改善の方向性

前章にて示したとおり、本校の研究は「**地理歴史科における科目相互の連携を図った授業実践**」を主題として、地理歴史に対する生徒の学力や学習意欲の向上を目指すものである。研究主題と内容は、本校生徒の実態・課題を踏まえたものであると同時に「平成 28・29 年度教育課程研究指定校事業 研究課題」の趣旨※1に基づいたものでもある。地理歴史の研究課題は「**世界史・日本史・地理関係科目について、各科目の相互の連携を図り、歴史的な見方・考え方や、地理的な見方・考え方を育成する授業実践の研究**」となっているが、次期学習指導要領において必履修科目となる「歴史総合」「地理総合」を見据えたものであることは言うまでもない。もちろん現行学習指導要領においても、歴史科目における地理との関連、地理科目における歴史との関連がそれぞれ重視されている。

本章では、特に「世界史Ａ」及び「日本史Ａ」の連携を中心に、「歴史総合」を想定した授業実践の研究について報告する。現行学習指導要領における「世界史Ａ」及び「日本史Ａ」の目標は次のとおりである。

《現行「世界史Ａ」の目標》

近現代史を中心とする世界の歴史を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ，現代の諸課題を歴史的観点から考察させることによって，歴史的思考力を培い，国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

《現行「日本史Ａ」の目標》

我が国の近現代の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付け，現代の諸課題に着目して考察させることによって，歴史的思考力を培い，国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

いずれも近現代史を中心とし、地理的条件や世界と日本を相互に関連付けること、

※1　学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善に関し、研究主題を設定して実践研究を行い、その成果を全国に普及し、各学校での指導改善の参考に資するとともに、今後の教育課程や指導方法の改善に資する（普通教科に関する公募課題）。

現代の諸課題に着目して歴史的観点から考察させることによって歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養うことが目標となっている。これに対し、新必履修科目である「歴史総合」では、次の３点が方向性として示されている。

《新必履修科目「歴史総合」の方向性》

(1) 世界とその中における日本を広く相互的な視野から捉えて，近現代の歴史を理解する。
(2) 歴史の推移や変化を踏まえ，課題の解決を視野に入れて，現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察する。
(3) 歴史の大きな転換に着目し，単元の基軸となる本質的で大きな問いを設け，諸資料を適切に活用しながら，比較や因果関係を追究するなど社会的事象の歴史的な見方・考え方を用いて考察する歴史の学び方（「類似・差異」「因果関係に着目する等）を身に付ける。

上記(1)・(2)に示されているとおり「歴史総合」は、現行の「世界史Ａ」及び「日本史Ａ」を融合的に関連付け、現代的な諸課題の形成等について近現代の歴史を中心に考察する科目であると捉えることができる。一方(3)では、歴史の学び方を身に付ける科目であるとして「**単元の基軸となる本質的で大きな問いを設けること**」「**社会的事象の歴史的な見方・考え方を用いて考察すること**」などが具体的に示されている。「歴史総合」で獲得した歴史の学び方や概念等を基礎として、新選択科目である「世界史探究」「日本史探究」では、さらに広く深く探究していく。

新学習指導要領においては、新しい時代に必要となる資質・能力として「**学びに向かう力・人間性の涵養**」「**生きて働く知識・技能の習得**」「**未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成**」といった３つの柱が掲げられている。これらの資質・能力を踏まえ、各教科・科目では学ぶ意義を明確化するとともに、教科相互のつながりや社会との連携・協働を意識した教育課程の編成（カリキュラム・マネジメント）が求められる。

なかでも今回の改訂において中核を為す（教員一人ひとりの手にかかっている）ものが「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善である。「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」に対する定義や考え方もさまざまではあるが、「中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月）※2」に示された社会科（地理歴史科）における「深い学び」の要点は次のとおりである。

※2「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」

《社会科（地理歴史科）における「深い学び」の要点》

「社会的（歴史的，地理的）な見方・考え方」を用いた考察，構想，説明や議論等の学習活動が組み込まれた，課題を追究したり解決したりする活動が不可欠である。具体的には，教科・科目及び分野の特質に根ざした追究の視点と，それを生かした課題（問い）の設定，諸資料等を基にした多面的・多角的な考察，社会に見られる課題の解決に向けた広い視野からの構想（選択・判断），論理的な説明，合意形成や社会参画を視野に入れながらの議論などを通し，用語・語句などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，主として社会的事象等の特色や意味，理論などを含めた社会の中で汎用的に使うことのできる概念等に関わる知識を獲得するように学習を設計すること。

ここでは「深い学び」に不可欠な要素として「**課題を追究したり解決したりする活動**」が掲げられており、それに向けた具体的な学習活動として「諸資料を基にした多面的・多角的な**考察**」「課題の解決に向けた広い視野からの**構想**」「論理的な**説明**」「合意形成や社会参画を視野に入れながらの**議論**」が挙げられている。これらの学習活動（**考察・構想・説明・議論**）とって重要な視点となるものが「**見方・考え方**」であり、それを生かした「**課題（問い）の設定**」である。

ここでいう「**見方・考え方**」は、課題を追究したり解決したりする活動において社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を**考察**したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて**構想**したりする際の視点や方法であると捉えられる。中央教育審議会の「社会科、地理歴史科、公民科ワーキンググループ（WG）」によって示された「歴史総合」に関わる「**歴史的な見方・考え方（追究の視点や方法）の例**」は次のとおりである（図式化は筆者による）。

《「社会的な見方・考え方」を働かせたイメージの例（歴史総合）》

【社会的事象の歴史的な見方・考え方】

社会的事象を，時期や推移などに着目して捉え，類似や差異などを明確にしたり，事象同士を因果関係などで関連付けたりすること。

○時系列に関わる視点
　時期，年代　など
○比較に関わる視点
　類似，差異，特色　など
○推移に関わる視点
　展開，変化，継続　など
○相互のつながりに関わる視点
　背景，原因，結果，影響，関係性，相互作用　など

考察

現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を多面的・多角的に考察する力

構想

歴史に見られる諸課題について，複数の立場や意見を踏まえて選択・判断する力

視点を生かした、考察や構想に向かう「問い」の例	
「考察」に向かう「問い」の例	**「構想」に向かう「問い」の例**
・何を契機に，（地域や国家，日本・世界などの）相互の関係はどのように変化したのか ・どのように転換し，後にどのような変化をもたらしたのか ・どのような（地域や国家，日本・世界などの）共通点もしくは相違点がみられ，それは後の時代に何をもたらしたのか ・歴史に見られる諸課題は，現代社会においてどのような課題と関連して現れているのか	・なぜそのような判断をしたと考えるのか ・どのような選択が可能だったのか ・歴史を振り返り，よりよい未来の創造のために何を展望するのか

すなわち「**歴史的な見方・考え方を用いる（働かせる）**」とは、社会的事象を**考察する**にあたって、例えば「**時期（年代）**」や「**推移（変化）**」に着目したり、事象同士を「**比較（類似･差異）**」したり、相互の「**因果関係（背景･原因･影響など）**」などを関連付けたりすることにより、諸課題の解決に向けて**構想（選択・判断）する**ことであると解釈できる。各教科等の特質に応じた「**見方・考え方**」が今後の授業改善等において極めて重要であり、学びの「深まり」の鍵となるものである※3。

加えて先の「答申」では、「主体的・対話的で深い学び」が、１単位時間の授業の中ですべてが実現されるものではないことも強調されている。「単元や題材のまとまりの中で、例えば主体的に学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、学びの深まりを作り出すために、生徒が考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てるか、といった視点で実現されていくことが求められる」としている。こうした考えのもと、日々の授業改善といった視点を超えて、「**単元等のまとまりを見通した学び**」の重要性も説かれているところである。

以上のように、地理歴史科における学習指導要領改訂の動向と、これからの授業改善の方向性について、中央教育審議会の「答申」などから概観してきた。本校の具体的研究内容のうち、改めて「**授業実践の研究**」に関わる基本的スタンスについてまとめると、次の(1)～(6)のとおりとなる。

【研究内容１】科目相互の連携を図り、「見方・考え方を育成する授業実践
（※特に「歴史総合」を見据えた「世界史A」及び「日本史A」の連携）

※3 「見方・考え方」は、新しい知識・技能を既に持っている知識・技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力・判断力・表現力を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成するために重要なものである。また「見方・考え方」は、各教科等の学習の中で働くだけでなく、大人になって生活していくに当たっても重要な働きをするものとなる。

(1) 近現代の歴史を中心に、世界とその中における日本をそれぞれの視座から捉えるとともに、相互に関連付けるための単元の学習内容の工夫と精選を図る。
(2) 単元の基軸となる「大きな問い」を設定し、それを生徒が考察するためにより具体的な「小さな問い」をいくつか設け、段階的に「大きな問い」の考察へと向かうよう単元の学習内容と「問いの構造化」を図る。
(3) 多面的・多角的に考察することができるよう、多様な資史料を効果的に提示・活用する。
(4) 歴史の大きな転換点に着目しながら、現代的な諸課題につながる事象を捉えさせるとともに、よりよい社会の在り方について意欲的に追究させる。
(5) 「主体的・対話的で深い学び」の実現や言語活動の充実を図ることにより、思考力・判断力・表現力等の育成や、歴史を学ぶ意義についての理解の深化を図る。
(6) 評価規準を明確化するとともに、ペーパーテストやワークシート等の成果物、小テストなど、複数の評価材料を工夫する。また、知識・理解の評価に偏重することのないよう観点のバランスに配慮するほか、効果的な評価問題の開発に取り組む。

これらを踏まえ次節では、授業改善の中心となる**「問い」の設定と構造化**について詳しく報告したい。

２　「問い」の設定と構造化

新学習指導要領において、校種や教科を問わず求められているものが「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善の必要性である。資質・能力の３つの柱（「学びに向かう力」「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」）を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることを目標とするには、目先の考査や受験をゴールとする（そこで良い点数を取る）ような“知識伝達型”の授業だけでは不十分である。知識の「量」（どれだけ知っているか）も大切であるが、これからはむしろ知識の「質」を考えていかなければならない。すなわち、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、問題を見いだして解決したり、思いや考えを形成したり、創造したりすることに向かう「深い学び」こそ、生徒の人生にとって有益である。そうした学びの過程の中で「**見方・考え方**」が効果的に機能されれば、より深い概念的知識が習得され、豊かな思考・判断・表現の活動が生み出される。

とはいえ、授業でいきなり「見方・考え方を働かせよう」と投げかけても、生徒にとっては抽象的で、雲をつかむかの如くどうしてよいかわからない。そこで、生徒たちが「見方・考え方」を用いる（働かせる）ための具体的な**「問い」の設定**が重要となってくる。30～31 ページに提示したワーキンググループによる「社会的事象の歴史的な見方・考え方」のイメージでは、「何を契機に相互の関係はどのように変化したのか」などの問いから「**推移（変化）**」などに着目したり、「どのような共通点もしくは相違点がみられ、それは後の時代に何をもたらしたのか」などの問いから「**比較（類似･差異）**」や「**因果関係（背景･原因･影響など）**」などに着目したりする例が示されている。これら視点などから「歴史的な見方・考え方」を働かせることにより育成される「思考力・判断力」の例として、「**近現代の歴史を多面的・多角的に考察する力**」や「**歴史に見られる諸課題について、複数の立場や意見を踏まえて構想（選択・判断）する力**」が示されている（「歴史総合」の場合）。

「問い」にも様々な質があり、何を問うか（考えさせるか）によって「問い」のねらいも異なってくる。しかしながら、これからの授業改善において求められる「問い」とは、「深い学び」に不可欠な要素となる「思考・判断・表現」を促す「問い」である。そうした「問い」づくりの材料（ヒント）として、歴史科目においては「**時期**」「**推移**」「**比較**」「**因果関係**」の４つの視点が掲げられている※4。

また、「主体的・対話的で深い学び」が１単位時間の授業のみで全て実現されるわけではないことからも、単元等のプロセスの中で効果的かつ段階的に「問い」を設計していく必要性がある。まずは単元等において追究する学習課題（＝「大きな問い」）を設定し、生徒の学びに向かう方向性を明確化する。そして、「大きな問い」の考察・構想に向かうための「小さな問い」を適宜設定することで「問い」の構造化を図る。さらには、いくつかの単元を包括するような章ごとの基軸となる「問い」も考えられる。

以上のことを踏まえ、本校では「世界史Ａ」（１年次必修）及び「日本史Ａ」（２年次選択）において科目相互の連携を図った授業実践を進めるにあたり、生徒の思考を促し、単元等のまとまりを見通した「主体的・対話的で深い学び」を実現するため、次のような「単元構成モデル」を作成した。

※4 同様にワーキンググループ提示資料では、「社会的事象の地理的な見方・考え方」を「社会的事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けること」としており、「思考・判断・表現」を促す考察・構想に向かう視点として「位置や分布に関わる視点」「場所に関わる視点」「人間と自然の相互依存関係に関わる視点」「空間的相互依存作用に関わる視点」「地域に関わる視点」の５つが掲げられている。これらの視点は中学校社会科における地理的分野・歴史的分野とも共通している。

◇１年地理歴史「世界史Ａ」の単元構成モデル（平成 29 年度）

単元名	No	授業テーマ・問い	歴史的状況	日本史（歴史総合）との関連
世界史へのいざない		授業ガイダンス		◆歴史の扉「歴史と現在」
	1	なぜ先進国は北半球に集中しているのか		
	2	日本列島が大陸と陸続きだったら歴史は変わっていたか		
(1)東アジア世界	3	なぜ始皇帝は万里の長城を築いたのか		
	4	なぜ漢の領域は西に延びたのか		
	5	なぜ倭(日本)は冊封を結んだのか		
	6	なぜ隋は中国を再統一できたのか		
	7	なぜ日本は唐の支配を逃れることができたのか		
(2)南・東南アジア世界	8	インドは開放的か閉鎖的か		
	9	なぜガウタマは仏教を開いたのか		
	10	なぜインドに仏教が根付かなかったのか		
	11	なぜ東南アジアに幾つも世界宗教が分布しているのか		
(3)西アジア世界	12	なぜヘブライ人はユダヤ教を生み出したのか		
	13	なぜアケメネス朝は異民族を統治できたか		
	14	なぜイスラームは世界宗教となり得たのか		
	15	なぜスンナ派とシーア派に分かれたのか		
(4)ヨーロッパ世界	16	古代ギリシアの歴史を学ぶ意義とは？		
	17	なぜローマは広大な帝国を維持できたのか		
	18	なぜフランク王国はすぐ分裂したのか		
	19	なぜヴァイキングは地中海まで進出したのか		
	20	十字軍遠征は何をもたらしたか		
(5)結びつく世界と近世の日本	21	なぜ石見銀山はヨーロッパにも知られていたのか	a「自由と制限」 b「富裕と貧困」	◆近代化と私たち～社会構造の変化 (1)結びつく世界と日本 ・東西文明の接触と交流 ・アジア域内貿易
	22	なぜ明は足利義満との貿易を許可したのか		
	23	なぜ清は貿易港を広州1港のみに限定したのか		
	24	制限貿易と自由貿易はどちらがよいだろうか		
	25	コロンブスの交換は何をもたらしたか		
	26	なぜカトリックは否定されたのか		
	27	旧教・新教の対立はヨーロッパに何をもたらしたか		
	28	なぜキリスト教は日本の権力者に認められなかったのか		
(6)ヨーロッパ・アメリカの工業化と国民形成	29	なぜイギリスの産業革命は綿工業から始まったのか		(2)産業社会の到来と政治の変革 ・産業／市民革命 ・資本主義と海外進出
	30	マルクスの呼びかけに応じる？応じない？		
	31	自由や平等はすべての人のものであったか		
	32	フランス革命は誰が起こしたか		
	33	ナポレオンは英雄か		
	34	なぜウィーン体制は維持できなかったのか		
	35	なぜロシアの近代化は遅れたのか		
	36	なぜリンカンは奴隷解放を宣言したのか		
(7)アジア諸国の変貌と近代の日本	37	タンジマートと明治維新は何が違うか		(3)日本の改革とアジア・アフリカの変容 ・帝国主義と植民地支配 ・日清戦争と東アジア ・日露戦争と日本の帝国主義化
	38	なぜナオロージーは協力者から批判者へと変わったのか		
	39	アヘン戦争を防ぐ方法はあったか		
	40	なぜ日本は東アジアとの友好を捨てたか		
	41	日清・日露戦争は何をもたらしたか		
	42	アジアの民族主義者は日本をどうみていたか		
(8)帝国主義の時代	43	帝国主義は征服措置か防衛措置か		
	44	なぜイギリスとフランスはスーダンで衝突したのか		
(9)世界戦争と平和	45	大衆とはどんな人たちか	c「対立と協調」	◆大衆化と私たち～個人・集団と社会の関わり (1)大衆化と政治・社会運動 (2)総力戦体制 (3)国際紛争と国際協調
	46	第一次大戦はそれまでの戦争と何が違うか		
	47	なぜ日本はシベリアに出兵したのか		
	48	軍縮への道は可能であったか		
	49	なぜ中国は内戦へと突き進んだか		
	50	なぜアラビアのロレンスは英雄となったか		
	51	なぜニューディール政策は違憲なのか		
	52	なぜ大衆はヒトラーを支持したのか		
	53	アジア太平洋戦争は避けられない戦争であったか		

単元名	No	授業テーマ・問い	歴史的状況	日本史（歴史総合）との関連
(10) 戦後の世界と地域社会の歩み	54	冷戦は世界と日本にいかなる変化をもたらしたか	d「統合と分化」 b「開発と保全」	◆グローバル化と私たち～持続可能な社会の展望 (1) 多極化と地域統合 (2) 地域紛争と国際秩序 (3) 世界とその中の日本
	55	「冷戦前」と「冷戦後」では何が変わったか		
	56	なぜヨーロッパは統合し、イギリスは離脱したか		
	57	日本は積極的に開発支援を行うべきか		
持続可能な社会へ（主題学習）		①地球紛争と国際社会 ②核兵器と人類の共存 ③地球環境問題		

※「文化史」については授業の中で適宜取り扱っていく。
※ 上記の「授業テーマ・問い」については、数時間にわたり追究していくものもある。

◇２年地理歴史「日本史Ａ」の単元構成モデル（平成 29 年度）

単元名	単元の問い	No	授業テーマ・問い	世界史（歴史総合）との関連
			授業ガイダンス―歴史を学ぶ意味―	◆歴史の扉
(1) 江戸の外交体制	江戸時代の日本は開かれていたか閉ざされていたか	1	なぜヨーロッパは日本をめざしたのか	◆近代化と私たち～社会構造の変化 (1) 結びつく世界と日本
		2	キリスト教は「邪教」であったか	
		3	長崎貿易は日本経済にとってプラスであったか	
		4	日本と朝鮮・琉球との関係は対等か？対等でないか？	
		5	オランダ・清以外の国との通商に賛成か？反対か？	
(2) 開国と明治維新	開国によって失われたものは何であったか	6	なぜ幕府は開国する方針に転じたのだろうか	(2) 産業革命の到来と政治の変革 ・産業／市民革命 ・資本主義と海外進出
		7	阿部正弘と井伊直弼～どちらの対応を支持する？～	
		8	行列を横切った英国人を殺傷した従士を処刑すべきか	
		9	なぜ江戸幕府は滅亡したのか	
		10	戊辰戦争の勝敗を分けたものは何であったか	
(3) 富国強兵と文明開化	近代化は人々の生活を豊かにしたのだろうか	11	新政府がめざした国家とは何だったのか	(3) 日本の改革 ・明治維新と国民国家
		12	明治新政府の諸政策について評価しよう	
		13	なぜ西郷隆盛は「征韓論」を唱えたのだろうか	
		14	近代化は人々の生活を豊かにしたのだろうか	
(4) 自由民権運動と立憲制の成立	自由民権運動は成功か失敗か	15	どの国の政治制度をモデルとすべきか	
		16	なぜ言論集会は制限されたか	
		17	騒擾事件は民権運動に何をもたらしたか	
(5) 日清・日露戦争	日本の帝国主義化を支持するか、支持しないか	18	日清・日露戦争を経て国際環境はどのように変化したか	(4) アジア・アフリカの変容 ・帝国主義と植民地支配 ・日清戦争と東アジア ・日露戦争と日本の帝国主義化
		19	清や朝鮮の改革はなぜ成功しなかったのか	
		20	日本と清は連帯すべきか？対決すべきか？	
		21	日露開戦に賛成か？反対か？	
		22	日露戦争の結果を国際世論はどうみていたか	
		23	日本の帝国主義化は何をもたらしたか	
(6) 産業革命と社会の変容	過酷な労働を強いてでも産業革命を推進すべきか	24	日本の産業革命が成立した地理的・世界史的条件は？	
		25	農業の衰退をどう止めたらよいだろうか	
		26	過酷な労働を強いてでも工業化を優先すべきか	
(7) 政党政治の展開	なぜ国民の政治参加は制限されたのか	27	なぜ「民主主義」ではなく「民本主義」と訳語されたか	◆大衆化と私たち～個人・集団と社会のかかわり (1) 大衆化と政治・社会運動 ・大正デモクラシー (2) 総力戦体制 ・総力戦としての第一次世界大戦 ・戦後の国際協調 ・大衆文化、消費社会
		28	なぜ平民宰相は普通選挙制に慎重であったか	
		29	なぜ女性や社会主義者は政治から排除されたのか	
		30	1925 年はデモクラシーの大きな前進といえるだろうか	
(8) 第一次世界大戦と日本	中国権益拡大か？それとも国際協調か？	31	総力戦体制は何をもたらしたか	
		32	シベリア出兵のメリットとは何であったか	
		33	ワシントン体制は何をめざしたものであったか	
		34	中国権益拡大か？それとも国際協調か？	
近代の追究（テーマ学習①）		35	都市化や大衆化は何をもたらしたか	
(9) 昭和恐慌と満州事変	恐慌や軍部の台頭を防ぐことは可能であったか	36	なぜ恐慌は起こったか～恐慌を防ぐことは可能だったか	
		37	不戦条約・軍縮条約を評価しよう	
		38	なぜ軍部の台頭を止めることができなかったか	

単元名	単元の問い	No	授業テーマ・問い	世界史（歴史総合）との関連
(10) 第二次世界大戦と日本	アジア太平洋戦争は避けられた？避けられなかった？～大衆は戦争を支持したのか～	39	なぜヴェルサイユ・ワシントン体制は崩壊したのか	(3) 国際紛争と国際協調 ・協調外交と強硬外交 ・世界恐慌／昭和恐慌 ・ファシズムの台頭
		40	なぜ日中戦争は長期化したのか	
		41	なぜ日本はドイツ・イタリアと同盟したのか	
		42	なぜ国民の反戦運動が起こらなかったのか	
		43	北進か南進か～もし北進だったらどうなっていたか	
		44	なぜ日米交渉は破綻したのだろうか	
		45	東南アジアの人々にとって日本はアジア解放の英雄か	
		46	1945 年 8 月より前に戦争を終結できたか	
(11) 占領下の日本	なぜ占領政策は変化したのか	47	GHQは日本に何を求めたか	(4) 大戦後の世界と日本
		48	財閥は悪であったか	
		49	冷戦は世界と日本にいかなる変化をもたらしたか	
(12)55 年体制と高度経済成長	保守長期政権は何をもたらしたか	50	新安保条約への反対運動はなぜ巨大化したか	◆グローバル化と私たち～持続可能な社会の展望 (1) 多様化と地域統合 (2) 地域紛争と国際秩序 (3) 世界とその中の日本
		51	日本的経営に賛成か反対か	
		52	あなたの住む町が公害で汚染されたら？	
		53	クリーンな政治は可能か	
		54	なぜ自民党単独政権は崩壊したか	
現代からの探究（テーマ学習②）		55	①貿易摩擦問題 ②日本と世界の国際貢献 ③日本のアニメ・メディア文化　等	

※「文化史」については授業の中で適宜取り扱っていく。
※ 上記の「授業テーマ・問い」については、数時間にわたり追究していくものもある。

このような年間を通した「問い」の構成モデルをもとに、「世界史Ａ」及び「日本史Ａ」の各科目において、相互の連携を図った授業を展開した。授業の進行は現行の学習指導要領に則ったものであるが、表の右側に新科目「歴史総合」で想定されている単元名を併記して対照できるようにした。「世界史」及び「日本史」相互の関連として取り上げる事項は、「歴史総合」で取り上げられることが考えられる題材となるよう精選を図った。もちろん授業は“生き物”であり、全てが計画どおりに進んだわけではない。授業の進み具合や生徒の状況などに応じて、適宜修正や変更を加えていった。「問い」そのものを吟味し直したこともある。

とはいえ「見方・考え方」を働かせた、生徒の「思考・判断・表現」を促す「深い学び」を実現するために、そもそもどのような指針のもとで「問い」を具現化していけばよいか。教員の構成力が問われるところである。本校において「思考・判断・表現」を促すことをねらいとした**「問い」づくりの視点（ベース）**は次に掲げるとおりである（歴史科目の場合）。

「問い」づくりの視点（ベース）

(1)「考察させる問い」《見方を育てる》
… **時期、推移（変化）、比較（類似･差異）、因果関係（背景･原因･影響など）**
事象の意味や意義について問うもの
⇒ 例「どのように（どのような）……」「なぜ……」

(2)「構想させる問い」《考え方を育てる》
… **選択・判断、あるいは創造**を促すもの
⇒ 例「A or B」「A or not A」「賛成か反対か」「可能か」
(3) **その他**
… **生徒自身が問いを立てる。「正解のない問い」に向き合う。歴史を再評価する（本当にそうか？）。**

第一が「**考察させる問い**」である。「どのように〈how〉……」という問いの立て方はよくある。ただ問題は“どのように”で何を問うかである。「織田信長はどのような政策を行ったか」「ユダヤ教はどのような宗教か」という問いの“どのような”は、織田信長の政策・ユダヤ教の内容・特色を問うものである。したがって、「文章にしてまとめる・説明する（単語で答えるのではない）」といった言語レベルでの思考を伴うものではあるかも知れないが、厳密には「考察」とは言い難い。すなわち「思考」というよりは「知識」である。例えば「織田信長は戦国の世にどのような変化をもたらしたか（推移）」「ユダヤ教とキリスト教とではどのような違いがあるか（比較）」といった問いではどうか。少なくとも生徒が何に着目するか（見方）によって、複数の意見が出てくるはずである。生徒が考えずして「答え」を探そうとしても、教科書や資料集からそう簡単に正解を抜き出せるものではない。

とはいえ、講義形式（知識伝達型）の授業ばかりで、発問するとしても“単語で答えさせる”程度しかしていない状態の中、いきなり「どのように……（推移・比較）」と問いかけても生徒の思考（筆）は固まったままになるであろう。そこで有効となるのが「なぜ〈why〉……」の問いである。どの学問においても「なぜ……」は生徒から発せられる疑問の出発点である。そして背景や原因など因果関係に着目することは、歴史を学ぶ意義そのものに直結する。現代的な諸課題の背景に歴史ありである。

つぎに第二が「**構想させる問い**」である。ここでいう“構想”には、「選択・判断」や「創造」などが挙げられる。例えば「A or B」「A or not A」「賛成か反対か（支持・不支持）」「可能か」といった具合に、対立軸を設けて生徒に選択・判断させたりする。多数決によって結論を出すことが目的なのではない。大切なのは、そう「選択・判断」した根拠であり、多様な意見をもとに自己の考えを振り返ったり、広げたりすることに「深い学び」が実現される。あるいは、答えのない問いに向き合い、新たな考えを「創造」したりすることも有益であろう。「歴史総合」の方向性（ワーキ

ンググループ「審議のまとめ」）では、学習内容の焦点化を図るため、現代的な諸課題につながる歴史的な状況として「**自由と制限**」「**富裕と貧困**」「**対立と協調**」「**統合と分化**」「**開発と保全**」の５つの対立軸が例として示されている。

このほか、「その他の問い」として明記したものとして、生徒自身が問いを立てるもの（学びの中での気づき等）や、「歴史の再評価（本当にそうか？）」なども「主体的・対話的で深い学び」にとっては有効ではないかと考える。

以上のような視点（ベース）のもと、日々の授業において「大きな問い」から「小さな問い」まで様々な次元から幅広く「問い」を考えていく。いずれにしても一番重要なことは、生徒の実態をしっかり見極め、「問い」も生徒の目線（わかりやすい言葉等）に置換していくことである。そうでなければ生徒の意欲を喚起するどころか、かえって「無理感」を味わわせてしまうことになる。いきなり高度な「問い」から始めるのではなく、“スモールステップアップ”の発想で段階的に「問い」の質を高めていくことが肝要である。

３ 「科目相互の連携」の方策

最後に「科目相互の連携」の方策について幾つか示し、授業実践の報告に移りたい。もちろん連携の方策は多種多様であり、これまでも様々な研究実践があるところである。本校では主として「**内容**」「**方法**」「**意義・目的**」の３つの側面から連携の方策について模索した。

科目相互の連携（地理歴史）の視点

(1) 各科目（世界史・日本史・地理）での中心となる学習内容に他科目の要素を加え、より多面的・多角的に考察を深める。《内容》

… 例：世界史と日本史における比較（類似･差異）、因果関係（関連付け）

(2) 各科目で学習したこと（知識や見方・考え方）を活用して考察したり、教え合ったりする。《方法》

… 例：「地理」履修生徒と「日本史」履修生徒でグループ学習

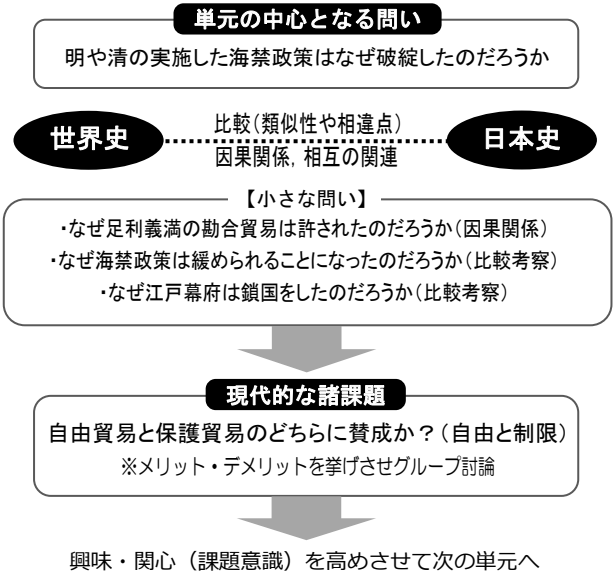
(3) 社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連等から、現代的な諸課題の解決（よりよい社会の実現）に向けて構想する。《意義･目的》

… 例：「資本主義は持続可能な経済か」

このうち、(2)のような異なる科目を履修している生徒による合同授業のような展開は、そう頻繁にできるものではないかも知れない。とはいえ、(1)「内容」と(3)

「意義・目的」を**単元等のまとまりを見通した学び**の中で実現することは大いに可能と考える。以下の図は、科目相互の連携を図った単元構成の一例（平成 28 年度「世界史Ａ」で実施）である。

「日本史Ａ」との関連を重視した「世界史Ａ」での単元構成例（本校作成）



上図の構成は、現代的な諸課題につながる対立軸（概念）等を取り上げ、その課題が形成されていく歴史的過程や背景等を「世界史」「日本史」との比較や因果関係などから捉えさせるものである。そのなかで正解のない課題（ここでは「自由貿易と保護貿易のどちらに賛成か」）の解決に向けて議論させたり、構想させたりすることにより、「見方・考え方」や思考力・判断力・表現力等の育成をねらいとしている。学習過程での「小さな問い」は、個人での思考を必須としつつ、ペアワークやグループ学習（ジグソー法、ブレーンストーミング等）などを取り入れながら追究させた※5。

ここまで**授業改善の方向性、「問い」の設定と構造化、「科目相互の連携」の方策**の３点についてまとめてきた。これを踏まえ、次節から授業実践事例を報告する。

※5　このページで取り上げた単元構成は研究１年目のものであり、単元のサイズが小さかったと反省している。２年目の平成 29 年度では、これより大きい視点で単元を構成した。

４　授業実践紹介

ここでは、34～36 ページに掲載した「単元構成モデル」の中から、「世界史Ａ」及び「日本史Ａ」それぞれ１単元ずつを取り上げ、**単元等のまとまりを見通した学び**についての事例を紹介する。

【事例①】 第１学年「世界史Ａ」 ⑵世界の一体化と日本

結び付く世界と近世の日本

（全８時間）

〈学習指導要領との関連〉

⑵ 世界の一体化と日本　　イ　結び付く世界と近世の日本

大航海時代のヨーロッパとアフリカ，アメリカ，アジアの接触と交流，アジアの諸帝国とヨーロッパの主権国家体制，大西洋世界の展開とアフリカ・アメリカ社会の変容を扱い，16 世紀から 18 世紀までの世界の一体化の動きと近世の日本の対応を把握させる。

１　単元の目標

ヨーロッパ・アジア・アメリカなど，諸地域との接触・交流による世界の一体化の動きと近世日本の対応について把握させる。

【単元の中心となる問い】異なる地域同士の接触と交流は何をもたらしたか（自由か制限か）

２　単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
世界の一体化への動きと近世の日本の対応について関心を高め，意欲的に追究しようとしている。	世界の一体化への動きと近世の日本の対応について，多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。	世界の一体化への動きと近世の対応に関する様々な資料から有用な情報を選択し，図表にまとめる活動を通し，空間的つながりに着目しながら整理している。	世界の一体化への動きと近世の日本の対応についての基本的な事柄を理解し，その知識を身に付けている。

３　単元の指導と評価計画

時程	学　習　内　容		評価の観点 関	思	技	知	評価方法等
第1時	**【ねらい】地球を一周する交易ネットワークの概要から，世界の一体化（世界と日本のつながり）について理解し，関心を高めさせる。**	**【問い】なぜ石見銀山はヨーロッパにも知られていたのだろうか** 石見銀山と世界とのつながり（銀による交易ネットワーク）を例に世界の一体化について考察する。		○		◎	世界の一体化について理解し，異地域・異文化の接触がもたらした影響について理解し，関心を高めている。（ワークシート）
第2時	**【ねらい】東アジアにおける明を中心とする冊封体制の確立について，中国・朝鮮・琉球と日本との関係を関連付けて捉えさせる。**	**【問い】なぜ明は足利義満に貿易を許可したのだろうか** 日明貿易や鄭和の遠征，倭寇の活動について諸資料から読み取り，東アジアにおける国際関係について考察する。		○	◎		14～15 世紀における東アジアの動向について，各国相互の関係などから捉え，その特色についてまとめている。（ワークシート）

時程	学習内容		評価の観点 関	思	技	知	評価方法等
第3時	【ねらい】アジア貿易へのヨーロッパ商人の参入が招いた影響について，朱印船貿易や鎖国など日本の動向と関連付けて考えさせる。	【問い】なぜ清は貿易港を広州１港のみに限定したのか 清と日本（江戸幕府）における貿易政策の変化とその要因について，比較考察する。		○	◎		アジア貿易へのヨーロッパ商人の参入とその影響について，清と日本の動向から比較し，まとめている。（ワークシート）
第4時	【ねらい】自由貿易と制限貿易におけるメリット・デメリットについて，現代的な課題を踏まえながら考察させる。	【問い】「制限貿易（海禁・鎖国）」と「自由貿易」ではどちらがよいか 自由貿易と制限貿易の利点や問題点について，多面的・多角的に考察し，ミニディベートを行う。	○	◎			ミニディベートを通して，現代の諸課題への関心を高めるとともに，自分や他者の多様な意見から考えを深めている。（ワークシート）
第5時	【ねらい】ヨーロッパとアメリカ大陸との出会いが両地域及び世界に与えた影響について多面的・多角的に捉えさせる。	【問い】「コロンブスの交換」は何をもたらしたか ヨーロッパとアメリカ大陸との出会いついて考察し，その影響について捉える。	◎	○			ヨーロッパ世界とアメリカ大陸・日本との接触がもたらした影響について関心を高め，課題を見出している。（ノート）
第6時	【ねらい】ヨーロッパにおけるルネサンスと宗教改革の動向とその背景を捉えさせ，世界観や人間観の変容について理解させる。	【問い】なぜカトリックは否定されたのだろうか ルネサンスと宗教改革について調べ，その特色や社会の変容について理解する。		○		◎	ルネサンスや宗教改革が発生した背景や歴史的意義について理解している。（ワークシート）
第7時	【ねらい】ヨーロッパにおける主権国家体制の成立と旧教・新教間の対立を取り上げ，諸国家間や日本との関係について捉えさせる。	【問い】旧教・新教の対立はヨーロッパに何をもたらしたか 清と日本（江戸幕府）における貿易政策の変化とその要因について，比較考察する。		○		◎	16～17 世紀におけるヨーロッパ諸国の動向について，宗教対立・勢力均衡などの側面から図表にまとめている。（ワークシート）
第8時	【ねらい】日本の為政者がキリスト布教に消極的であった要因について考えさせ，自由と制限について現代的な課題を踏まえながら捉えさせる。	【問い】なぜキリスト教は日本の権力者に認められなかったのだろうか バテレン追放令や禁教令などの動きから日本の為政者がキリスト布教に否定的になった要因について探究し，その是非について検討する。	◎	○			信教の自由・制限が歴史的にどのような対立や差別・迫害を生み出してきたか，現代的な諸課題を踏まえながら，その要因と解決に向けて，考えを深めている。（ワークシート）

4　授業展開（全８時間）

第１時　石見銀山がヨーロッパにも知られていたこと（銀による交易ネットワーク）を題材に，「世界の一体化」についてつかむ。
〈本時の問い〉なぜ石見銀山はヨーロッパにも知られていたのだろうか

《「見方・考え方」を働かせる思考（考察・構想）と教材》

第１時では、単元の導入として「石見銀山がヨーロッパにも知られていたこと」を取り上げ、地球を一周する交易ネットワークから世界の一体化についての概要をつかむとともに、世界と近世日本との結び付きについて考察させ、単元全体への関心と課題意識を高めさせることをねらいとした。

はじめに、生徒にとって馴染みの深いマルコ＝ポーロの『世界の記述（東方見聞録）』とザビエルの書簡から、13 世紀頃と 16 世紀頃におけるヨーロッパ人の日本に対する見方がどのように変化しているかを読み取らせる。さらには「ティセラの日本図（1595 年にポルトガル宣教師が描いた地図）」に石見銀山が記されていることを提示し（教科書に掲載）、16 世紀後半のヨーロッパにおいて石見銀山が日本の銀鉱山として唯一知られていたことを生徒はつかむ。こうして生徒たちが「日本の一銀山がヨーロッパ人にとって有名であるはずがない」といった思い込みとの“ずれや違和感”を抱いたところで、本時の問い（なぜ石見銀山がヨーロッパに知られていたか）を提示する。

つぎに、16 世紀における日本とヨーロッパとのつながりについて考察させる。生徒は副教材の世界史資料集と日本史資料集（印刷して配付）から、「①16 世紀のヨーロッパ」「②16 世紀の日本」の概況についてまとめ、その相互関係（「結び付き・つながり～ヨーロッパ←→アジア～」の空欄）について考え、記述していく。学習活動を通して生徒たちは、日本とヨーロッパをつなぐものとして銀などの世界商品があること、また貿易商人だけでなくキリスト教の宣教師たちが日本とヨーロッパを往来していたことを発見する。こうして「世界の一体化」の概要・概念について理解するとともに、その背景としてルネサンス・大航海時代・宗教改革などヨーロッパ史における近世の幕開けが関連していることをつかむ。

本時のまとめとして「単元の中心となる問い（MQ：「世界の一体化」（異なる地域同士の接触と交流）は何をもたらしたか〈自由か制限か〉）を提示し、授業に対する振り返り（発見したこと・疑問に思ったこと 等）を記述させた。

はじめに～ヨーロッパ人の日本に対する認識とは～

A　（　　）世紀頃の日本の様子　　『世界の記述（東方見聞録）』より

チパングは，東の方，大陸から1500マイルの大洋中にある，とても大きな島である。……この国ではいたるところに黄金が見つかるものだから，国人は誰でも莫大な黄金を所有している。……この島に生えている木々は，いずれも強い芳香を放ち，すこぶる貴重な香木であって，たとえば沈香その他に比べても決して劣らぬ高価なものである。黒胡椒はもとより，雪のような白胡椒も豊富なのである。黄金を初めとする様々な奇貨異物の産額も，これまた驚くばかりの巨額である。

B　（　　）世紀頃の日本の様子　　ザビエルがインドのゴアにいる宣教師に宛てた手紙より

カスチリア人は，この島々をプラタレアス群島（銀の島）と呼んでいる。……日本の島々の外に銀のある島などは発見されていない。

Q1　A・Bの文章に登場している“高価なモノ”を全て書き出してみよう！
（　　）

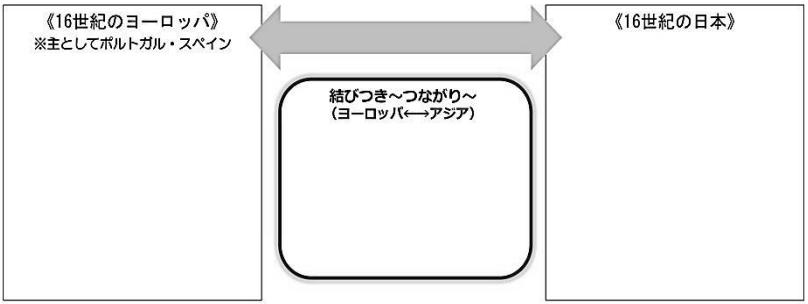
Q2　AとBでは，ヨーロッパ人の日本に対する見方がどう変化しているか？
（　　）

★さらに「教科書80ページ」を見てみると……

《学習課題―問い―》

なぜ

【課題】16世紀における世界の動きと日本との結びつき（つながり）について調べ、まとめよう。



《「主体的･対話的で深い学び」の視点からの授業改善①》

本校の生徒層では、中学校までの既習知識を忘れてしまっていたり、時間的・空間的認識に対する理解がやや不足していたりする場合がある（例えば「石見銀山を知らない」など）。

日本とヨーロッパとの関連について考察する学習活動は、４名程度のグループを構成して役割分担させ、相互に教え合ったり、助け合いをさせるなどして協力させた。また本時の問いに対する答えをグループで発表させるとともに、個人単位で学習への振り返りを行わせた。

第２時　東アジアにおける明を中心とする冊封体制の成立と海禁について、中国・朝鮮・琉球と日本との関係を関連付けて捉える。

〈本時の問い〉なぜ明は足利義満に貿易を許可したのだろうか

《「見方・考え方」を働かせる思考（考察・構想）と教材》

第２時では、14～15 世紀における東アジアの動向について、中国（明）・朝鮮・琉球と日本における相互関係から捉えさせるとともに、倭寇の活動や日明貿易、鄭和の南海遠征などを取り上げ、明を中心とする冊封・朝貢体制が確立したことを考察させることをねらいとした。

この際、中国（明）・朝鮮・琉球及び日本（室町時代から織豊政権期）など各国の動向に関わる基本事項については生徒各自で調べることとし（教員による細かな説明を避け）、授業では資料を用いた考察を中心とするようにした。※生徒は教科書や資料集などを用いて調べ、ワークシートにある年表の空欄を補充する。基本的知識については後日「小テスト」を実施して確認する。

本時の授業では、明が海禁政策を実施したことを示したうえで、中学校の既習事項である「室町幕府の足利義満が勘合（日明）貿易を行った」ことを思い出させる。ここで生徒たちは、「明は海上交易を禁止しているのに、なぜ足利義満は貿易ができたのか」と疑問を抱く。また、勘合が用いられた理由として「倭寇と区別するため」と生徒は既習していることから、倭寇の活動が明の対外政策に何らかの影響を与えていたのではないかとの仮説が生じる。

そこで生徒に「A倭寇に関する記事」「B足利義満の国書」「C明からの返礼」の３つの史料を提示し、生徒に読み取らせる。Aの史料から「明が倭寇への対応に苦慮していたこと」「後期倭寇には中国人も含まれること」がわかる。また、B・Cの史料から足利義満と中国皇帝との冊封・朝貢関係を読み取ることができ、永楽帝の時代には朝貢を促すために、鄭和の艦隊が東南アジアやインド洋海域の国々に派遣されていたことに気付く。こうして 15 世紀はじめには、朝鮮・日本・琉球及び東南アジア各国との冊封関係が結ばれ、明を中心とする冊封・朝貢体制が確立したことを理解する。

【課題１】なぜ足利義満は明との貿易を許されたのだろうか（関連：資料集 P101）

A 明初①，沿海の要地に衛所②を建て，戦船を設く。…寇船③の至るのを見て，たちまち風を望み逃げのがる。而して上に又統率してこれを防ぐもの無し。嘉靖三十二年三月④，王直⑤諸倭を率ゐ，大挙して入寇し，艦を連ねること数百，海をおおいて至る。…大抵，真倭は十の三，倭に従ふ者十の七なり。（明史・日本伝）

①明王朝の初期，　②軍事基地，　③倭寇の海賊船，　④1553 年，
⑤中国安徽省出身の密貿易家。五島・平戸を根拠地とした後期倭寇の首領。後に殺された。

問１ Aの史料から読み取れることとして正しい文を次のア～エより２つ選べ。（　・　）
ア 倭寇の活動は明の官憲（政府や役人）でさえもお手上げの様子であった。
イ 倭寇は明の官憲（政府や役人）による戦船をみると次々と逃げていった。
ウ この当時における倭寇の大部分は日本人であった。
エ この当時における倭寇の大部分は日本人ではなく，中国人であった。

問２ なぜ「倭寇」の活動（密貿易や略奪行為）は激しくなっていったのだろうか。
（　　）

B 日本准三后某，書を大明皇帝陛下に上る。日本国開闢以来，聘問を上邦に通ぜざること無し。
国書を大明皇帝陛下に差し上げます。　中国に使者を遣わさなかったことはありません。
某，幸いにも国釣をとり，海内におそれ無し。特に往古の規法に遵ひて，肥富をして祖阿に相副
幸運にも政権を掌握し，国内の者はみな私に従っています。そこで古くからのしきたりを守って，
へしめ，好を通じて方物を献ず。金千両，馬十匹，扇百本，屏風三双……（善隣国宝記）
親交を結ぶために土産物を献上させます。

C …朕大位を嗣ぎてより四夷の君長朝献する者十百を以て計う。…ここになんじ日本国王源道義，
私（明の恵帝）が即位してから多くの周辺諸国の長が朝貢してきた。　今ここに日本国の王たる源道義（義満）が
心王室に存し，君を愛するの誠をいだき波濤を踰越し，使を遣して来朝し，……朕甚嘉す。……
明に敬意を表し，君主への忠誠を抱いて海を渡り，使者をつかわした。　私はたいへん嬉しく思う。
今使者を遣し，大統暦を班示し，錦綺二十匹を賜う。（善隣国宝記）
その返礼に使者をつかわし，大統暦や織物を与えよう。

問３ Bの史料中「日本准三后某」とは誰をさすか。また使者として赴いた人物を２名挙げよ。
日本准三后某…（　　）　使者…（　・　）

問４ Cの史料中に足利義満を「日本国王」と称していることにはどのような意味があるか。
（　　）

問５ 室町幕府の４代将軍である足利義持が一時貿易を中断したのはどうしてか。※予想でよい
（　　）

問６ 永楽帝の命で７回にわたり南海遠征を行った鄭和の目的はどんなことか。
（　　）

第３時 アジア貿易へのヨーロッパ商人の参入が招いた影響について、清の状況と日本の鎖国とを比較して考察する。

〈本時の問い〉なぜ清は貿易港を広州１港のみに限定したのか

《「見方・考え方」を働かせる思考（考察・構想）と教材》

第３時では、時期に着目しながら清と日本における貿易政策の変化とその要因についてそれぞれ把握し、その類似点や相違点について考察するとともに、ヨーロッパ勢力の参入に伴うアジア貿易への影響について捉えさせることをねらいとした。

生徒たちはすでに明（清）が海禁政策を実施したことを把握しているが、後期倭寇が密貿易などで対抗したほか、ポルトガル商人がアジアへ進出するようになった 16 世紀以降は海禁が緩和され、生糸・香辛料・銀などを対象に民間貿易が許可された。これに伴い中国には大量の銀が流入した。また、17 世紀以降は台湾の鄭成功一族が東アジア海上世界で台頭し、清朝はこれに対抗するため海禁令を強化する。そして鄭氏が降伏した 1684 年には再び海禁が解除されるが、福建・広東から東南アジアに移住する南洋華僑が増えるとともに、イギリス東インド会社の商船などポルトガル以外の船も来航するようになった。こうして 1757 年、乾隆帝はヨーロッパとの貿易港を広州のみに限定した。生徒たちはこのような明・清の海上政策に関する変化がどのような要因・背景のもとで行われたか、資料集などを参考にしながら考え、ワークシートに記入する。

また、日本においても 17 世紀前半に江戸幕府が鎖国政策を実施している（このことは生徒が中学校までの既習事項として把握している）。ここで生徒に「なぜ江戸幕府が鎖国したのか」を追究させることで、明・清の海上政策（とくに清がヨーロッパとの貿易港を広州のみに限定したこと）と日本の鎖国とにおける要因・背景の共通性（あるいは相違点）について考えることができる。

【課題２】なぜ明・清は「海禁政策」を緩めることなったのだろうか？（関連：資料集 P108）

時　期	海禁の状態	その理由など
明代初期～16 世紀半ば	海禁令強化	《海禁の目的》 例）皇帝権力による貿易利益の独占をはかるため。
↓	↓	↓
1567 年頃	海禁緩和 民間貿易許可	《海禁緩和（民間貿易許可）の背景・要因》 《海禁緩和（民間貿易許可）がもたらした影響》
↓	↓	↓
17 世紀～1683 年	海禁令強化	《海禁の目的》
↓	↓	↓
1683～1757 年	海禁解除 民間貿易許可	《海禁緩和（民間貿易許可）がもたらした影響》
↓	↓	↓
1757 年～	ヨーロッパ貿易を広州１港に限定	《広州のみに限定した目的》※自分で考えてみよう（予想でよい）

問１　貿易によりメキシコや日本産による大量の銀が流入した。このことで中国（明・清）ではどのような税制の変化が起こったか，簡潔に説明せよ。

問２　以下の年表は，日本の江戸幕府が鎖国を完成させるまでの過程について示したものである。江戸幕府が「鎖国政策」をとったのはなぜだろうか。また，鎖国の実態はどのようなものであったか，簡潔に説明せよ。（資料集 P105）

年代	将軍	歴　史　的　事　項
1612	秀忠	幕領にキリスト禁教令を発布（翌年には全国へ）
1616		中国船を除く外国船の入港地を平戸・長崎のみに制限する。
1623	家光	イギリスが平戸の商館を閉鎖し，退去する。
1624		スペイン船の来航を禁止する。
1633		奉書船（老中から許可を得た船）以外の海外渡航を禁止
1634		海外との往来や通商を制限する。
1635		日本人の海外渡航と帰国の全面禁止。中国船の入港を長崎のみに制限。
1639		ポルトガル船の来航を禁止。
1641		オランダ商館を長崎の出島に移す（鎖国の完成）

第４時　自由貿易と制限貿易におけるメリット・デメリットについて、現代的な課題を踏まえながら考察・構想する。

〈本時の問い〉「制限貿易（海禁・鎖国）」と「自由貿易」ではどちらがよいか

《「見方・考え方」を働かせる思考（考察・構想）と教材》

第４時では、これまでの学習事項（自由貿易を求めるヨーロッパ勢力に対して、自国の保護から貿易を制限するアジア）を踏まえ、現代的な諸課題につながる対立軸〈自由か制限か〉について生徒でミニディベートを行い、多面的・多角的に考察したり、自分や他者の多様な意見から相互に考えを深めさせたりすることをねらいとした。

生徒には、「制限貿易」と「自由貿易」を支持する根拠についてそれぞれ挙げさせ、自分の考え（どちらを支持するか）に関わらず、どちらの立場になってもディベートできるようにした。もちろんここでは多数決や勝敗を決めるのではなく、より複数の意見（双方のメリット・デメリット）が出されることを目的としており、次回以降で触れる「布教・信教面」における〈自由・制限〉にもつながる問いである。

【課題３】「海禁（鎖国）政策」と「自由貿易」のどちらがよいか，ミニディベートしてみよう。

私は「海禁（鎖国）政策」がよいです。	私は「自由貿易」がよいです。
・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・

《その他の意見》

《「主体的･対話的で深い学び」の視点からの授業改善②》

第４時ではグループごとにミニディベートを行い、そこで得られたグループごとの見解について、全体でシェアリングを図った。グループ内ではじゃんけんによって「自由貿易派」と「制限貿易派」に分かれ（あえて自分の意志で選択できないようにする）、ワークシートに記入された根拠をもとに討論させた。あえて自由に選択できないようにする意図としては、①グループ全員がどちらかの意見に偏ってしまうことを防ぐこと、②班員全員が必ず発言するようにコントロールすることなどである。ディベート（勝敗を目指してしまうのでジャッジ役はおかない）を通して生徒たちは、グループとしての見解（どちらがよいか）をまとめる。その見解をグループの代表２名が他のグループへ説明しにいく。

ともすれば「アクティブラーニング」＝「グループ学習」といった誤解があるが、グループ学習に充てる時間と同等の時間を「個人作業」の時間にも充てている。グループ学習の前提となるのは、やはり個人レベルでの思考ではないかと考える。またグループ学習をする際は、時間やルールなどを提示するようにしている。フリーにすると、時として発言力のあるごく少数の生徒のみが主導・先導したり、活動したがらない生徒がさらに活動をしないといった事態に陥ってしまうことがある。いずれにしても生徒たちは活発に議論し（学習が苦手な生徒も含め）、見解をまとめようと努力していた。

第５時　「コロンブスの交換」を題材に、ヨーロッパとアメリカ大陸との出会いが両地域及び世界に与えた影響について多面的・多角的に捉える。

〈本時の問い〉「コロンブスの交換」は何をもたらしたか

《「見方・考え方」を働かせる思考（考察・構想）と教材》

第５時では、「コロンブスの交換」を取り上げ、ヨーロッパのアメリカ大陸到達（異なる地域同士の接触）により、双方にどのような影響がもたらされたかについて、様々な視点から追究することをねらいとした。

授業のはじめに、本校の前庭で教員が育てたトマトを提示し、これがアメリカ大陸原産の食物であると同時に、当初は観賞植物であったことを紹介する。ジャガイモやキムチに使われる唐辛子もアメリカから各地に伝わり、重要な作物となった。生徒は「そうだったのか」と関心を寄せる一方で、アメリカ大陸には何がもたらされたのかと疑問を抱いていく。

そこで本時の問いを示したのち、「コロンブスの交換」を図式化したものをノートに書き、それぞれ何がもたらされたか、教科書や資料集などから拾い記していく。すると作物や家畜、鉄器の技術などに加えて天然痘などの疫病なども挙げられることに“違和感”をおぼえていく。こうして生徒たちは「良いと思われる影響」からしだいに「良くないと思われる影響」に気付き始めるようになる。スペインによる征服活動やキリスト布教などにより先住民たちの生活は破壊され、人口激減やアフリカからの奴隷移入などがもたらされことへの関心を高めていく。このことは、16 世紀以降における日本へのヨーロッパ勢力の来航とその影響にもつながることとなる。

第６時　ヨーロッパにおけるルネサンスと宗教改革の動向とその背景について捉え、世界観や人間観・宗教観の変容を理解する。

〈本時の問い〉なぜカトリックは否定されたのだろうか

《「見方・考え方」を働かせる思考（考察・構想）と教材》

第６時では、ルネサンスによる世界観・人間観の問い直しが宗教改革などに結び付いた過程や背景などを追究するとともに、その特色やヨーロッパ社会及び近世日本を含む諸地域に与えた影響について考えさせることをねらいとした。

はじめにルネサンスの概念と背景について説明し、神中心の世界観から現世を肯定する人間を中心とした世界観への脱却が図られたこと、その表れとして地中海世界における経済的繁栄を背景に多くの芸術家（作品）や学者（学説）が登場したことを理解させる。

生徒は本時の問いをもとに、ルターの宗教改革・カルヴァンの宗教改革の特色について調べ、ペアワークなどで発表し合うとともに、こうした動きに対してイエズス会をはじめとするカトリック側が積極的に海外布教へと進んでいった（日本を含む諸地域にさまざまな影響をもたらした）ことを発見した。

【課題１】なぜヨーロッパでカトリックは否定されたのだろうか？

＜ルネサンスと宗教改革＞

◆中世ヨーロッパ世界：キリスト教（ローマ＝カトリック）支配による時代

人間は神による被造物であり，運命は決定づけられている。

一方で神に縛られない人間中心の生き方を模索する動き（芸術活動）

⇒ ルネサンス…人文主義〔＝(12　　)〕

(1) ルターの宗教改革（ドイツ 1483～1546，著書『キリスト者の自由』）

【契機】教皇レオ 10 世による(13　　)の販売　※聖ピエトロ大聖堂修築資金

ルターは 1517 年『14　　』を発表し，教会を厳しく批判

【主張】①(15　　)論：信仰によってのみ義とされる

②聖書中心主義：聖書の(16　　)語訳を行う

◆(17　　)が活版印刷術を改良

【結果】1555 年(18　　)の宗教和議

⇒ ドイツ内の諸侯はカトリック派とルター派のどちらを採用してもよい

(2) カルヴァンの宗教改革（フランス出身のちスイス亡命 1509～1564，著書『キリスト教綱要』）

【契機】ルター宗教改革の影響，ジュネーヴで改革

【主張】①予定説：罪からの救済は神によって予定されている（儀式でも信仰でもない）

②(19　　)観：職業は神による召命（天職）であるため，そこで得られる富や利潤は正当であるという考えが商工業者の間に広がっていく⇒ 資本主義の自由な営利活動の根拠

【結果】フランス・ネーデルラント（オランダ）・スコットランド・イギリスに広まる

⇒ ローマ教皇の権威を認めず，聖職者の特権を否定するプロテスタント（新教徒）

第７時　ヨーロッパにおける主権国家体制の成立と各国の動向に触れ、新教・旧教の対立がもたらした諸国家間の戦争と和解について把握する

〈本時の問い〉新教・旧教の対立はヨーロッパに何をもたらしたか

《「見方・考え方」を働かせる思考（考察・構想）と教材》

第７時では、16～18 世紀のヨーロッパにおいて主権国家が成立し、互いに対等な関係を結んだり勢力均衡を図りながら競い合ったりするなかで、新教・旧教の対立がもたらしたユグノー戦争と三十年戦争を取り上げ、その過程と結果について理解させることをねらいとした。

はじめに主権国家の概念について説明するとともに、スペイン・フランス・イギリスなどでは絶対王政とよばれる統治形態が現れたことに触れた。※ただし、各国における動向の詳細については授業で取り上げると時間を要するため、各自で基本事項を学習させ、後日「小テスト」を実施した。

前時に学習した宗教改革により、ヨーロッパでは旧教・新教の両派に分かれた対立がみられるようになった。生徒たちは本時の問いに向かうため、ワークシートに提示された「新旧両派による対立が引き起こした宗教戦争」の事例としてユグノー戦争と三十年戦争の要因と結果について調べ、ペアワークで説明し合う。このうちフランスでは 1598 年にナントの王令が発せられ、新教徒に対して条件つきながら信仰の自由を保障し、旧教徒とほぼ同等の権利を認めてユグノー戦争は終結した。また三十年戦争のウェストファリア条約（1648 年）では、アウクスブルクの宗教和議が確認され、カルヴァン派とルター派の権利も同等なものとなった。こうしてヨーロッパでは宗教対立から和平（信仰の自由が認められていく）へと進んでいくなか、織豊政権期から江戸幕府初期にわたる日本では為政者によって「禁教」政策が唱えられていったことを理解する。

＜問＞新旧両派による対立が引き起こした次の宗教戦争について調べ，簡潔に説明せよ。

a）ユグノー戦争	b）三十年戦争

第８時　日本の権力者がキリスト布教に消極的であった要因について追究し、現代的な諸課題を踏まえながら、改めて〈自由と制限〉について考える。

〈本時の問い〉なぜキリスト教は日本の権力者に認められなかったのか

《「見方・考え方」を働かせる思考（考察・構想）と教材》

第８時では、前時に学習した近世ヨーロッパにおける宗教対立を踏まえ、豊臣政権下から江戸初期にかけての「禁教政策」について取り上げ、信教の自由と制限が歴史的にどのような対立や差別や迫害を生み出してきたか、現代的な諸課題も踏まえながらその要因と解決に向けて考えを深めさせることをねらいとした。

はじめに本時の問いを提示するとともに、前時に学習したナントの王令やアウクスブルクの宗教和議に触れ、これに対し日本ではどうであったか比較してみることが本時の内容であることを説明する。生徒には「島原の乱」「踏絵」など中学校までの既習知識があり、生徒たちは容易に「キリスト教を禁止した」と答えることができる。とはいえ、その背景や要因について「なぜ」と問われるとなかなか説明できない。

そこで資料として「A バテレン追放令」「B 禁教令」を示し、キリスト禁教の理由について追究させる。史料から直接読み取ることができることは、「強制的に改宗したり、神社仏閣を破壊したりしていること」や「日本の政治を改変しようとしていること」「幕府の政令に背き、神道や仏教などを排撃していること」などである。しかし豊臣秀吉の出した宣教師追放令では、従来どおり商船の来航を認めたために、宣教師の完全追放には至らなかった。江戸幕府は初めキリスト教を黙認していたが、スペイン・ポルトガルの侵略（イギリス・オランダ等のプロテスタント勢力がカトリック勢力の悪評を喧伝した）や信徒の団結などが恐れられるようになり、宣教師やキリスト教信者に対して処刑や国外追放などの激しい弾圧・迫害を加えた。史料等を手がかりにこうした背景をつかんだ生徒たちは、改めて信仰の自由と制限に対する是非（それがもたらした歴史的状況）について考えを深めていく。

【課題２】なぜ日本の権力者はキリスト教を認めなかったのだろうか？

A　豊臣秀吉が発布した「バテレン追放令」（1587 年）

一，日本ハ神国たる処，ⓐ**きりしたん国**より邪法①を授け候儀，太以て然るべからず候事。
（たいへんよろしくないことである。）

一，其国郡の者を近付け門徒②になし，神社仏閣を打破るの由，前代未聞に候。

一，伴天連③，其知恵の法④を以て，心ざし次第ニ檀那⑤を持ち候と思召され候へハ，右の如く日域⑥の仏法を相破る事曲事に候条，伴天連儀，日本の地ニハおかせられ間敷候間，

宣教師は，その教義や知識をもって人々に布教し，その者たちは自分の意志で信者になっていると考吉公は思っているが，日本の仏教を破壊したり強制的に信者を増やしたりしていることはけしからんことであり，

一，黒船⑦の儀ハ商売の事に候間，各別に候の条，年月を経，諸事商売いたすべき事。

商売が目的なので特別である。

①邪悪な教え，ここではキリスト教のこと。　②信者。　③キリシタン宣教師。　④教義や科学・医学などの知識。
⑤信者。　⑥日本。　⑦スペイン・ポルトガルの南蛮船。

問１　下線部ⓐがさしている国を具体的に２つ答えよ。（　　）（　　）

問２　Aの史料から読み取れることとして適当なものを**ア**～**エ**より２つ選べ。（　　と　　）

ア　大名の中には自らキリシタンとなって領内に布教し，信者を増やす者もいた。
イ　来日したキリスト教の宣教師たちは日本の神道や仏教の信仰を認めていた。
ウ　南蛮船との貿易は従来どおり行ってもよいこととした。
エ　宣教師は南蛮船に乗ってくるため，南蛮貿易も禁止となった。

B　夫れ日本は，元是神国也。……ここに吉利支丹の徒党 適 日本に来る。ただに商船を渡して資財を通ずるのみに非ず，みだりに邪法を弘め正宗①を惑わし，以て域中の政号②を改め，己が有となさんと欲す。是大禍の萌也。制せざる有るべからず。……伴天連の徒党，皆件の政令③に反き神道を嫌疑し正法を誹謗し，……邪法に非ずして何ぞ哉。

①正宗…神道や仏教，　②域中の政号…日本の政治，　③件の政令…幕府の禁令

問３　史料Bは 1613 年に出された幕府の禁教令である。禁教の理由について簡潔に説明せよ。

《「主体的･対話的で深い学び」の視点からの授業改善③》

先述のとおり、単元の構成では「単元の中心となる大きな問い」を設け、１単位時間ごとの「小さな問い」が「大きな問い」の考察に向かっていくよう工夫してきた。そこでワークシートでは単元のまとめ（または途中判断）となるような簡易な記述問題を出し、「大きな問い」に対して生徒自身が問いに向かうことができるようにした。こうすることで、生徒一人ひとりの学習到達状況について教員が確認することができるとともに、生徒自身にとっても学習内容（何がわかったか）や伸びた力（何ができるようになったか）を振り返ることができる。そのためにも生徒が記述したノートやワークシート、リフレクションなどの「思考過程」をポートフォリオ化しておくことが望ましい。一方で、多人数の生徒が記述した成果物等を毎時間回収して教員がチェックするのも現実としては大変であろう。生徒も教員も、いかに無理なく効率よく見取っていくかも検討していく必要があるのではないかと考える。

単元のまとめ　明や清，あるいは日本の江戸幕府が実施した「海禁政策（鎖国）」のメリットとデメリットについて述べよ。

単元のまとめ　ヨーロッパで宗教改革が起こった背景（原因）と、イエズス会による日本のカトリック布教はなぜうまくいかなかったのか、説明してみよう。

【事例②】 第２学年「日本史Ａ」 ⑵近代の日本と世界

日清・日露戦争 ──アジアの近代──

（全６時間）

〈学習指導要領との関連〉

⑵ 近代の日本と世界　　ア　近代国家の形成と国際関係の推移

条約改正や日清・日露戦争前後の対外関係の変化，政党の役割と社会的な基盤に着目して，国際環境や政党政治の推移について考察させる。

１　単元の目標

日清・日露戦争を通じて日本の帝国主義化がすすみ，国際環境が変化していく過程について，アジアや列強諸国の動向や国民生活と関連付けて把握させる。

【単元の中心となる問い】日清・日露戦争はアジアに何をもたらしたか
―日本の帝国主義化を支持する？しない？―

２　単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
日清・日露戦争前後の国際環境の推移や国内社会の変化に対する関心と課題意識を高め，意欲的に追究している。	日清・日露戦争前後の国際環境の推移や国内社会の変化から課題を見いだし，多面的・多角的に考察するとともに，その過程や結果を適切に表現している。	日清・日露戦争前後の国際環境の推移や国内社会の変化に関する諸資料を収集し，有用な情報を適切に選択し，情報を読み取ったり，図表にまとめたりしている。	日清・日露戦争前後の国際環境の推移や国内社会の変化についての基本的な事項を理解し，その知識を身に付けている。

３　単元の指導と評価計画

時程	学　習　内　容		評価の観点 関	思	技	知	評価方法等
第1時	**【ねらい】日清・日露戦争に関する風刺画から，日本やアジア諸国，列強との関係の変化について理解し，関心を高めさせる。**	**【問い】日清･日露戦争を経て国際関係はどのように変化したか** 風刺画から日清・日露戦争前後の国際関係について読み取り，その変容について考察する。		○	◎		日清・日露戦争がもたらした日本と世界への影響について理解し，課題意識を高めている。（ワークシート）
第2時	**【ねらい】清国内・朝鮮国内における保守派と改革派との対立について，日本との関係を関連付けて捉えさせる。**	**【問い】なぜ清や朝鮮の改革は成功しなかったのか** 清や朝鮮国内における政治動向について年表や諸資料から読み取り，日清・日朝関係の変化について考察する。		○		◎	日清戦争前における東アジアの動向について，各国相互の関係などから捉え，その概要についてまとめている。（ワークシート）
第3時	**【ねらい】日清戦争の原因･結果と世界に与えた影響について考察させ，その歴史的意義について評価させる。**	**【問い】日本と清は連帯すべきか？対決すべきか？** 日露戦争の利点や問題点について，諸資料から多面的・多角的に考察し，ミニディベートを行う。	○	◎			日清戦争の原因と結果について，日本と東アジア・列強との関係を踏まえて評価し，自分や他者の多様な意見から考えを深めている。（ワークシート）

時程	学　習　内　容		評価の観点				評価方法等
			関	思	技	知	
第4時	【ねらい】日露開戦のメリット・デメリットについて，当時の国際関係や経済状況などから多面的・多角的に考えさせる。	【問い】日露戦争に賛成か？反対か？ 日露戦争の利点や問題点について，諸資料から多面的・多角的に考察し，ミニディベートを行う。		○	◎		日露戦争について課題を見い出し，ミニディベートを通して自分や他者の多様な意見から考えを深めている。（ワークシート）
第5時	【ねらい】日露戦争の結果とアジア諸国，世界に与えた影響について，多面的・多角的に捉えさせる。	【問い】日露戦争の結果を国際世論はどのようにみていたか 日露戦争の結果に対する国内世論，及びアジア諸国や世界に与えた影響について諸資料から考察する。	◎	○			日露戦争が与えた各国への影響についてまとめ，関心を高めている。（ワークシート）
第6時	【ねらい】日清・日露両戦争を経て日本が帝国主義化していった過程や結果について，日本の台湾・朝鮮統治と満州経営などを例に捉えさせる。	【問い】日本の帝国主義化はアジアに何をもたらしたか 日本の台湾・朝鮮統治について把握するとともに，日本の帝国主義化が国内外にもたらした変化について考えさせる。	○	◎			日清・日露両戦争（明治日本がとった進路）がもたらした国内外の変化とその歴史的意義について関心を高めている。（ワークシート）

4　授業展開（全６時間）

第１時　日清・日露戦争に関する風刺画を題材に，両戦争前後における国際関係や日本の立場の変化について考察し，日本の帝国主義化の概要をつかむ。

〈本時の問い〉日清･日露戦争を経て国際関係はどのように変化したか

《「見方・考え方」を働かせる思考（考察・構想）と教材》

第１時では、単元の導入として「世界史Ａ」で学習した「帝国主義」の概念とその背景について、ヨーロッパ列強各国の動向やアジア・アフリカの植民地化などに着目して振り返るとともに、日清・日露戦争前後の風刺画から、日本を含む国際関係の変化について考察することで、単元全体への関心と課題意識を高めさせることをねらいとした。

はじめに、「帝国主義」について振り返る。帝国主義時代における列強各国と中国の動向（対比年表）、アフリカ・太平洋地域における植民地分布、列強の植民地面積に関する資料から、気が付いたことを挙げさせる。そして帝国主義の概念と世界に与えた影響についてペアワークで確認し、本単元では「帝国主義」という概念を基軸として、日清・日露戦争がアジアにもたらした影響などについて追究していくこと（＝単元の問い）を提示する。

つぎに、日清・日露戦争前後の風刺画から、日本を含む国際関係、とくに日本の立場の変化についてグループで考察させる。４名を基本とするグループでは、生徒個人が「Ａ漁夫の利（日清戦争前）」「Ｂ中国を分割する列強（日清戦争後）」「Ｃ火中の栗（日露戦争前）」「Ｄ日露戦争と列強の思惑（日露戦争後）」のいずれかを担当し、「どの国をさしているか」「どのような状況を表しているか」考えていく。そのシェアリングが図られたところで「日清・日露戦争を経て日本の立場はどのように変化したか」という問いの答えをグループで話し合って導き出していく。こうして生徒たちは、両戦争を通じて日本の立場や実力が列強にも認められるようになってきたこと、その一方で日本の帝国主義化がすすみ、韓国併合や満州権益の獲得につながっていったことを発見していく。

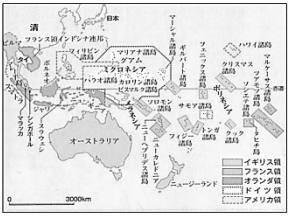
本時の学習を踏まえ、「日本の帝国主義化を支持するか」という単元の基軸となる問いを提示し、生徒に考えさせる。ペアで発表し合い、「支持する」「支持しない」双方の視点から意見が出される。どのような理由（見方・考え方）をもとにそう判断したのか「リフレクション」によって振り返らせ、次時の学習につなげていった。

【課題１】「帝国主義」とは何か？ **世界史での学習から** 《世界史資料集 P225 参照》

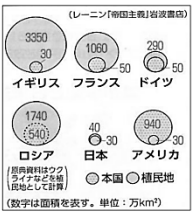
イギリス（英）	フランス（仏）	ドイツ（独）	ロシア（露）	中国（清）
議院内閣制	第三共和政	皇帝による親政	皇帝独裁政治	皇帝政治
強力な海軍力による植民地拡大，３Ｃ政策	ロシアなどへの国外投資 植民地領有世界第２位	皇帝ヴィルヘルム２世による３Ｂ政策	フランスからの資本導入 シベリア鉄道で極東進出	国内での民族運動・反乱 と外国による圧力
1858 インド統治開始 1875 スエズ運河買収 1877 インド帝国樹立 1882 エジプト占領	1858 インドシナ出兵 1881 チュニジア進出 1887 仏領インドシナ 1891 露仏同盟	1866 普墺戦争 1870 普仏戦争 1884 清仏戦争	1853 クリミア戦争 1867 アラスカ売却 1891 シベリア鉄道 露仏同盟	1856 アロー戦争 1884 清仏戦争 ◆洋務運動 ◆ベトナムの宗主権失う
1894～95 日清戦争 ⇒ 下関条約、三国干渉、列強による中国分割、義和団事件……				
1898 清から威海衛・九竜半島を租借 1899 南アフリカ戦争	1898 ファショダ事件 1899 清から広州湾を租借	1898 清から膠州湾を租借 1899 バグダード鉄道	1896 東清鉄道 1898 清から旅順・大連を租借	◆朝鮮の宗主権失う ◆変法運動 1900 義和団事件
1904～05 日露戦争 ⇒ ポーツマス条約、韓国併合、満州支配、辛亥革命……				
1904 英仏協商 1907 英露協商	1904 英仏協商		1907 英露協商	◆辛亥革命 1912 中華民国成立
1914～ 第一次世界大戦 ⇒ 日本の参戦と中国進出、ヴェルサイユ・ワシントン体制……				

◆列強によるアフリカ分割

◆列強による太平洋分割



◆列強の植民地面積



★気付いたこと…（　　）

【問】帝国主義とは何か，また，世界にどのような影響を与えたか。

【課題２】 日清・日露戦争を経て「日本の立場」はどう変化したか？ **資料から読解！**

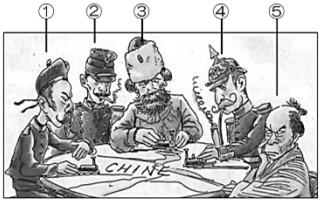
A　日清戦争前（担当：　　）

《どこの国？》①（　日本　）②（　　）
③（　　）④（　　）

《この風刺画は何（どんな関係や状況）を表しているか？》

●考えるポイント● なぜ風刺画に③の国が登場しているの？

B　日清戦争後（担当：　　）

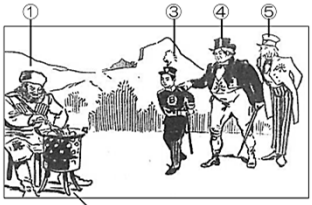


《どこの国？》①（　　）②（　フランス　）
③（　　）④（　ドイツ　）
⑤（　　）

《この風刺画は何（どんな関係や状況）を表しているか？》

●考えるポイント●　5人（5つの国）がしていることは？

C　日露戦争前（担当：　　）



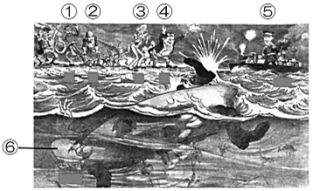
②（火中の栗）

《どこの国？》①（　　）②（　韓国　）
③（　　）④（　　）
⑤（　　）

《この風刺画は何（どんな関係や状況）を表しているか？》

●考えるポイント●　日本の後ろにいる国は日本をどう見ている？

D　日露戦争の結果（担当：　　）



《どこの国？》①（　フランス　）②（　ドイツ　）
③（　アメリカ　）④（　イギリス　）
⑤（　　）⑥（　　）

《この風刺画は何（どんな関係や状況）を表しているか？》

●考えるポイント●　①～④の国々のリアクションの違いとは？

【問】日本の「帝国主義化」を支持するか，支持しないか。当時の日本国民になったつもりで，あなたの意見を述べよ。★正解はありません！「支持するor支持しない」の理由が大事です！

日清・日露戦争を経て日本はどう変わったか？

A　日清戦争前（簡潔に）	B　日清戦争後（簡潔に）
C　日露戦争前（簡潔に）	D　日露戦争結果（簡潔に）

【生徒の回答「日本の帝国主義を支持するか」（選択・判断①）※一部】

〈支持する意見〉

・当時は他国より強くないといけないから、自国を広げ人口を増やし、負けないようにする。
・列強とつながりを持つことで、これからの日本が発展していけると思うから。そして不平等条約の改正は日本にとって良いことだから。
・植民地として支配されるよりは、帝国主義側に回り日本の誇りを持ったほうが良いと思う。
・帝国主義をしないと日本自身が植民地の場所とされてしまう。また他国とつながりがないと日本が発展しないと思うから。
・安価な労働力や原材料などの資源が手に入るならいいと思う。
・日本の国土だけでは列強と渡り合うのは不可能だから植民地を作り国力を上げていくべき。
・日本の領土が小さいからこそ、広い領土の植民地が必要だと思う。
・日本は欧米の国々より出遅れた国なので、発展するためには植民地を獲得し、産業に必要な原料、労働力、市場をｇｅｔする必要があると思うから。なにより支配されるより支配するほうがいいから。
・植民地を多く手にすることで、多くの資源を獲得できるようになり、本国、植民地ともに国の繁栄につながっていくと思うから。
・欧米の先進資本主義国が投資先などを求めて（原材料など資源、安価な労働力）アジアに進出すればアジア諸国は発展した国になる。
・領土を増やし、国を豊かにして他の国と平等な条約を結んだほうがいいから。
・帝国主義化をしなければ周りの国に植民地にさせられたかもしれないし、結果日本は優位な立場になったから。
・やらないとやられるという世界で、だんだん日本が帝国主義化して日本という国が強力になったことは良いことだから。
・強い国である清やロシアを倒したことで、不平等条約を結ばせていたイギリスやアメリカと同等の立場になり、理不尽な戦争をおこされずに済むから。

〈支持しない意見〉

・戦費は国民からの税金で成り立っているから、次々と資源などを求めて外国に進出するということはその分のお金は国民の負担になると思うから。
・帝国主義化することで日本は自分達は強い、アメリカ・イギリスと同類と思って調子に乗って、また新たな戦争を引き起こしたりするから支持しない。
・植民地のために戦争が起き、各国が不安定な状態になる。戦争のための資源が無駄。今のように足りない資源は貿易で補うべき。
・当時の日本国民は重税に苦しみ賠償金を得ることでいつか自分たちの生活が楽になると思っていたが、得たのは植民地だけで自分たちの生活は楽になっていないから。
・戦争をして植民地拡大していくのもいいと思うが、戦争をやるということは人々が死ぬことだし、日露戦争が終わった後も日比谷焼き打ち等があり、決して平和ではなかった。
・植民地を獲得するために色々な国と戦争をしたため、多くの犠牲者が出たからです。この帝国主義の延長線上に第一次世界大戦があると私は思います。
・１か国１か国は今までより緊密に結びつけられるようになったけど、他国のように人口が急増したり帝国主義化していない所に移住する人が増えて、その国に迷惑をかけてしまうから。
・植民地を増やしたり勢力拡大は良いけど、それによって他の列強諸国と対立し、争いが増えたりするし、負けた時の代償が日本には大きいと思うから。
・植民地での大規模反乱等、リスクが多いから。
・列強と呼ぶには国が小さく、植民地も少ないため、他の列強諸国による力の支配に敗れてしまうから。又支配出来たとしても管理する力は日本にはないから。
・日本は軍備を拡張し、列強のように強くなったけど、国民には大きな負担だったから。

【生徒の「リフレクションカード」による記述（考えたこと、疑問に思ったこと）※一部】
・日清、日露戦争や帝国主義を通して日本がどのように変化していったのか、詳しく調べることができた。色々な国の立場になって考えることができた。
・アメリカやイギリスは日本が中国に勝った時点でなぜ潰そうとしなかったのか。小さな日本が列強になったらアメリカやイギリスは困るのではないのか。
・今までとくに気にしていなかった風刺画だけど一枚の絵でそのときの世界の状況や各国どうしの関係性を知ることができるのが風刺画なんだと思った。Ｃの絵でロシアがなぜ栗をもっていたのかわからなかった。
・江戸時代の頃は鎖国をしていて外国との関わりがなかったのに、いざ開国したら戦争戦争でその軍事費は国民の税金でまかなわれていると思うから、国民の負担は大きかったんだろうなと思う。
・なぜ日本はこんなに小さく、戦争に使う武器も少ないのに戦争に勝ち、帝国主義化までできたのだろうか。日本が意外と強いということがわかった。
・列強諸国は、他に戦争以外の方法はなかったのだろうか。
・帝国主義化していくことによって、武力の差で植民地支配下の領域の大きさが変わることに疑問をもった。
・日本はアジアだけど広くて大きい中国をおさえて列強に名を連ねているのが凄いと思った。それで言うならイギリスも他と比べて領土が狭いので、やっぱり技術力とか知恵が生きていくには必要なものなのだと思った。
・帝国主義化によって起きた争い、戦争を通じて色々な影響について考えることができた。特に日本と清の朝鮮獲得についての争いにロシアが入ることもどうしてなのかと思った。
・日清、日露戦争で「小日本」「小倭」とバカにされていた日本が清やロシアに勝っていて日本は本当は列強なんだとわかりました。
・日本は確かに立て続けに勝っているので良いことかもしれないけど、ライバル視された国々などに逆襲されてしまうのではないかと思った。

第２時　**清国内・朝鮮国内における保守派・改革派の対立と、日朝・日清関係の変化との関係について捉え、その概要について理解する。**
〈本時の問い〉なぜ清や朝鮮の改革は成功しなかったのか

《「見方・考え方」を働かせる思考（考察・構想）と教材》

第２時では、19 世紀後半における中国と朝鮮国内の動向について「保守か開明か」という対立軸から考察させ、日清戦争が起こった背景、日清戦争前後における日本と朝鮮及び清との関係の変化について捉えさせることをねらいとした。

中国では、アヘン戦争や大変天国の乱などの混乱の後、1860～70 年代にかけて政治が安定し、漢人官僚らを中心に洋務運動が展開されたが、中国の伝統や制度を保持しようとしたため、自由主義や立憲主義などは考慮されなかったほか、中華思想に基づく伝統的な冊封・朝貢体制も限界を迎え始めていた。また清を宗主国としていた朝鮮では、江華島事件を契機に日本が開国を迫り、不平等条約である日朝修好条規が結ばれた。それ以後、国内では日本の明治維新にならい近代化を進めようとする開化派（親日派）と、大院君を中心とする保守派（親清派）とが対立した。

これらの背景を踏まえ、生徒たちはグループで協力しながら日清開戦に至るまでの朝鮮問題の動向などについて調べ、「近代化に向けた改革がなぜ保守派の反対にあったのか」について意見を出し合いながら、その対立が日清開戦へと向かっていくことを把握する。そして下関条約によって清は第一に「朝鮮の独立」を認めることになった点を踏まえ、生徒たちは日清戦争前後において「日本・朝鮮・清」の相互関係がどう変化したかについて文章や図でまとめていく。

【課題３】 清や朝鮮の改革はなぜ成功しなかったのか？（保守か開明か） **思考を深めよう**

《朝鮮国内の動向》

朝鮮は清を宗主国（朝貢して保護してもらう）としており，鎖国していた。1875 年，日本が朝鮮近海に軍艦を派遣して徴発した❶＿＿＿＿＿＿**事件**をきっかけに朝鮮に開国を迫り，1876 年❷＿＿＿＿＿＿**条規**が結ばれた。これは日本の❸＿＿＿＿＿＿**権**を認めさせる不平等条約であった。

開国以後，**朝鮮国内では日本の明治維新にならい近代化を進めようとする開化派（親日派）勢力が台頭してきた。しかし国王高宗の父である❹＿＿＿＿＿＿を中心とする保守派（親清派）と対立した。**

《中国国内の動向》

中国（清）では，**アヘン戦争**や**太平天国の乱**などで長く混乱したが，1860～70 年代にかけて政治が安定し，軍事技術を中心にヨーロッパの近代工業をとりいれて富国強兵をはかる❺＿＿＿＿＿＿**運動**が展開された。これらの改革は，太平天国の鎮圧に活躍した**曾国藩**や❻＿＿＿＿＿＿らの漢人官僚を中心に推進されたが，**中国の伝統や制度を保持しようとしたため，自由主義や立憲主義などは考慮されなかった。**

一方，中華思想に基づく伝統的な冊封・朝貢体制も限界をむかえていた。清には朝鮮・ベトナム・ビルマ・タイ・ネパールなどが朝貢し，冊封を受けていたが，フランスのインドシナ進出に伴い，ベトナムの宗主権を失っていた。

【日清開戦までのおもな出来事】

年　代	出来事	解　　説
1882（明治 15）	壬午軍乱	
1884（明治 17）	甲申事変	
1885（明治 18）	天津条約	
1889（明治 22）	防穀令	
1894（明治 27）	甲午農民戦争	
	日英通商航海条約	

問１　清や朝鮮国内において，近代化に向けた改革が保守派の反対にあったのはなぜだろうか。

※調べたことや考えたこと

問２　上記の動向を踏まえ，日清戦争前後における「**日本・清・朝鮮**」との関係や関連する出来事について，それぞれまとめよう。（※まとめ方は自由ですが，文章のみではなく図を用いて表現できるとよい）

日清戦争前における【日本・清・朝鮮】	日清戦争後における【日本・清・朝鮮】

●ポイント● これまでの学習を踏まえて整理しよう　　●ポイント● 下関条約の結果どうなったか。朝鮮の反応は？

第３時　日清開戦に関わる国内議論や日清戦争の結果における外国人の見方から、日清戦争の歴史的意義について評価する。

〈本時の問い〉日本は清（東アジア）と連帯すべきか？対決すべきか？

《「見方・考え方」を働かせる思考（考察・構想）と教材》

第３時では、日清戦争前後における国内政治・言論界の動向や外国人の見方について取り上げ、日清開戦の是非と結果に対する歴史的意義について、多面的・多角的に考察し、生徒に歴史評価させることをねらいとした。

本時の問いを提示し、生徒には５つの史料「A山県有朋首相の演説」「B・C福沢諭吉の言論」「Dアメリカ人歴史家による日清戦争の評価」「Eイギリス人イザベラ・バードの記事」を提示する。はじめにAの史料は、軍備増強の必要性を説いた山県首相の演説であり、朝鮮を防衛の生命線としていることを読み取らせる。つぎにB・Cの史料はいずれも福沢諭吉が記したものであり、1881 年と 1885 年におけるアジア観の変化が読み取れる。こうした論説変化の背景には、朝鮮をはじめとする東アジア情勢の変化があるとともに、「近代化の努力をしない国は欧米諸国によって分割されても仕方ない」「日本だけは近代化を進めて独立を守り、欧米諸国とともに東アジアの分割に加わるべき」といった議論は、日清戦争前後に最もさかんであったことを把握させる。

さらにDの史料はアメリカ人の歴史家による日清戦争の評価であり、日本の国際的地位の向上だけでなく、朝鮮の自由・独立について賞賛している。またEの史料は朝鮮を旅行していたイギリス人の記事であるが、「日本が清への従属関係を破棄するよう迫っていた」とあり、朝鮮国内が決して日本に好意的でないことが間接的に読み取れる。

生徒たちは史料読解を踏まえ、単元の基軸となる問いである「日本の帝国主義化を支持するか」について、本時の問いである「連帯か対決か」という対立軸をもとに考えていく。

【課題４】　日本は清（東アジア）と連帯すべきか？対決すべきか？　思考を深めよう

A　予算中に就キマシテ最歳出ノ大部分ヲ占メルモノハ，即陸海軍ノ経費デ御座イマス。……国家独立自衛ノ道ニ二途アリ。第一ニ①主権線ヲ守禦スルコト，第二ニハ②利益線ヲ保護スルコトデアル。其ノ主権線トハ国ノ疆域※1ヲ謂ヒ，利益線トハ其ノ主権線ノ安危ニ密着ノ関係アル区域ヲ申シタノデアル。　（帝国議会衆議院議事速記録）

※1…境界

問１　これはある首相による施政方針演説であるが，誰か。　（　　）

問２　上記に述べられている①**主権線**，②**利益線**とはそれぞれ何とさしているか。

①（　　）②（　　）

B　今，東洋で文明の中心になっているのは日本であるから，責任をもってアジア東方を保護するべきである。……清や朝鮮は西洋の侵略を防ぐことができない。日本が武力で清や朝鮮を応援することは，日本にとって当然のことである。　（1881 年「時事小言」より）

C　清や朝鮮が開化するのを待っている余裕はない。むしろ，日本はアジアから抜け出して，西洋諸国と行動をともにするべきである。清や朝鮮が隣の国だからといって，遠慮はせず，西洋人と同じ方法で接するのがよい。　（1885 年「時事新報」より）

問３　上記**B・C**は同じ人物が記したものであるが，誰か。　（　　）

問４　上記**B・C**における主張のちがい（変化）について，理由も含めて説明せよ。

（　　）

D　日本からみれば，この戦争（日清戦争）は完全な成功だった。西洋列強は喝采し，日本における彼らの特権を相次いで放棄した。そして，日本を対等の主権国家として承認した。日本は韓国に自由を贈り，韓国国王は中国皇帝，日本国天皇と肩を並べる皇帝の地位を得た。

（アメリカ人の歴史家による日清戦争の評価）

E　1895 年１月８日，私は朝鮮の歴史に広く影響を及ぼしかねない，異例の式典を目撃した。朝鮮に独立というプレゼントを贈った日本は，清への従属関係を正式かつ公に破棄せよと朝鮮に迫っていた。　（朝鮮を旅行していたイギリス人イザベラ・バードの旅行記）

問５　上記D・Eを読んで“あなたが考えたことや感じ取ったこと”を書きなさい。

（　　）

【改めて…】日本の「帝国主義化」を支持するか？（東アジアと連帯すべきか？対決すべきか？）

【生徒の回答「日本の帝国主義を支持するか」（選択・判断②）※一部】

〈支持する意見〉

・ただでさえ植民地にされかねない状況のアジアを守ることができるのは日本だけだったと思うから。
・日清戦争に勝利し、一歩列強に近づいたので、さらに帝国主義を進めて国力をつけることで本格的に列強の仲間入りができると思うから。
・文化的にも戦力としても進んでいる列強側につき、学ぶべきだと思う。
・日本が東アジアと連帯して欧米に立ち向かおうとしても、絶対に勝てないと思うので、帝国主義化するしかなかったと思う。
・欧米列強に挑むのは無謀なので、むしろ仲間になって進んだ技術を学んだほうがよい。
・近代化を目指し、植民地を増やしていけば列強と並び、日本側が植民地として支配されることを防ぐことができる。
・この頃の日本は脱亜論が出されているように、地位的にも軍事力などが欧米列強と対等になってきているので支持します。
・日本は立場的にこの時代弱く低い位置にいたため、いつ侵略されてもおかしくなかったと思うので、少しでも力は付けておいたほうがよいから。
・当時の国民だったとすれば帝国主義に賛成し、ヨーロッパなどの国と連携したほうがよいと考える。

〈支持しない意見〉

・東アジアと連帯していれば、あのような戦争は起きなかったのではないか。
・列強と同じような方法をやっても、日本は列強くらいの力をもっていないと思うから、後からどんどん劣っていくと思うから。
・帝国主義化により近隣諸国との関係がどんどん悪くなっていったように感じた。
・植民地や勢力圏を拡大することによって争いが起きるため支持しない。
・東アジアと連帯すべき。近隣諸国との関係を捨てたら貿易の面で問題が起きてしまう。
・確かに日本が帝国主義化することによって、様々な文化や世界の情報が入ってくるかもしれない。でも、やっぱり日本がいつ支配される側になるか分からないし、結局日本は利用されるだけだろうと思うから。
・東アジアと連帯した方が争いなどもなくなり、良い関係を保つことができると思うから。
・脱亜論だけを唱え、近隣諸国との関係を悪くするのは違うと思う。
・日本が帝国主義化してしまったら、列強に戦争をもちかけることになるから支持しない。
・東アジアと対決すべきではない。東アジアの中でも発展している日本がアジア諸国の発展をサポートしてあげればよいと思う。

第４時　日露開戦のメリット・デメリット（開戦論・非戦論）について、国際関係や経済状況などから多面的・多角的に考察・構想する。

〈本時の問い〉日露開戦に賛成か？反対か？

《「見方・考え方」を働かせる思考（考察・構想）と教材》

第４時では、日清戦争から日露戦争に至る過程について、国際関係の推移などに着目して把握するとともに、日露開戦に対する国内議論（日露協商論と日英同盟論、主戦論と非戦論など）を取り上げ、その是非について多面的・多角的に議論することをねらいとした。

日清戦争後、日本は下関条約において獲得した遼東半島をロシアの三国干渉によって清に返還した。また清では対日賠償金に伴う借款を代償に列強による中国分割がすすみ、やがて義和団事件・北清事変へと発展していった。こうした中でロシアは遼東半島への進出をはかり、日本国内の反発を招いていく。こうした背景を踏まえ生徒たちは、「日露開戦に賛成か？反対か？」という本時の問いに向かうため、開戦論・非戦論双方の主張とその根拠についてまとめていく。これをもとに、自分であればどのような選択・判断をするか考え、他の生徒たちとともに意見交流を図る。

こうした議論や意見交流などを行う際には、生徒たちにあらかじめ「予習（下調べカード）」に取り組ませる。50 分の授業の中で初めて調べさせると、それだけで時間の大半を要してしまい（時としてそれだけで終わってしまう）、せっかくの議論の時間が短くなる。また議論の際は、《「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善②（47 ページ）》でも示したとおり、全員がどちらかの意見に偏ってしまうことを防ぐため、どちらの立場になっても見解を述べることができるようにさせておくことが大切である。

◇「日本史A」予習（下調べ）カード　　※次回授業で回収します！

●「開戦論（日露開戦に賛成）」の根拠は何か（なるべく複数の視点から）

●「非戦論（日露開戦に反対）」の根拠は何か（なるべく複数の視点から）

● あなたはどう考える？（理由も）

【生徒の回答「日露開戦に賛成か？反対か？」※一部】

〈開戦論を支持する意見〉

・ロシアの言いなりになって日本が不利になるのであれば、それを食い止めるべきだと思う。
・ロシアの南下政策が進む前に止めた方が良いと思うから。
・強国ロシアとの戦争は日本も避けるべきだという意見もあったが、日英同盟を結びイギリスの後ろ盾があったので戦争に踏み切って良かったと思う。

〈非戦論を支持する意見〉
・内村鑑三の戦争廃止論を読んで、確かに戦争をすると容赦なく人を殺すし、殺したところで罪にならないからそれは人権を損害していると思うから非戦論。
・多額のお金がかかるのは日本的にもきついことだと思うし、兵力が限度に達していたということはたくさんの人が亡くなっているということだから、開戦すべきではなかったと思う。
・新たに死者を増やし、悲しむ人を増やす必要がないと思うし、戦争で永久の利益は手に入れられないと考えるため。
・領土や外交のために無理はしたくない。自国民が第一。
・着実に領土を拡大しているロシアに日本は勝てるかわからなかったし、多くの被害が出る。

第５時 日露戦争に結果に対する国際世論について取り上げ、アジア諸国や世界に与えた影響について把握する。

〈本時の問い〉日露戦争の結果を国際世論はどのようにみていたか

《「見方・考え方」を働かせる思考（考察・構想）と教材》

第５時では、日露戦争に対する各国の反応について諸資料から読解し、日露戦争の結果がアジア諸国や世界に与えた影響について多面的・多角的に考察するとともに、日本の国際的地位が向上しアジアの被抑圧民族を覚醒させたことに気付かせることをねらいとした。

本時の問いとともに生徒に史料を提示する。史料は「1ポーツマス条約における賠償金放棄」「2日露戦争がアジア諸国に与えた影響」「3日露戦争後におけるアメリカ世論の変化」に関するものである。はじめに1については、アメリカの『ワシントン・スター』紙において賞賛されている一方，日本の『万朝報』社説では賠償金が取れなかったことに対し全権大使小村寿太郎を断罪している。つぎに2については、ベトナムの東遊（ドンズー）運動やビルマの初代首相バー・モウの記事を取り上げ、日露戦争の勝利がアジアに民族意識の目覚めを促し、夢や希望を与えたと評価されていたことを読み取らせる。さらに3については、1905 年の『ニューヨーク・サン』紙が日本海海戦における日本の勝利を賞賛している一方で、1909 年のアルフレッド・マハンの論説では日本の大陸進出や日本人の移民問題に対する懸念が表明されている。

これらの史料から生徒たちは、日露戦争に対するアメリカやアジア諸国の反応について把握する。

日露戦争に対する各国の反応・影響について

《ポーツマス条約における賠償金放棄について》

◆アメリカ『ワシントン・スター』紙（1905 年 8 月 30 日）
「日本人は，人道のため賠償金の権利を放棄した。この偉大な好意は日本人が勇敢なだけでなく，寛大な国民であることを示した」

◆日本『万朝報』社説（1905 年 9 月 1 日）
「帝国の光栄を抹殺し，戦勝国の顔に泥を塗りたるは我が全権（小村寿太郎）なり，国民は断じて帰朝を迎ふることなかれ。これを迎えるには弔旗を以てせよ」

《日露戦争がアジア諸国に与えた影響》

◆ベトナムの東遊（ドンズー）運動（日本への留学を勧めるパンフレットより）
「ベトナムの全ての権力と権益は，青い眼をした赤色の白人（フランス）の掌中にある。黄色人種のわれわれは，むりやりに堕落させられ，屈辱を受けている。……日本の近代史を学んで，日本人がいかにして強力なヨーロッパ人に勝利することができたかを知ることができた。われわれが組織をもつにいたったのも，そのためである。……われわれは最も精力的で勇敢な若いベトナム人の中から選抜し，日本に留学させている。……われわれの目的はわが国民を救済することにある」

◆バー・モウ『ビルマの夜明け』より（インドから分離したビルマの初代首相）
「最初のアジアの目覚めは日本のロシアに対する勝利に始まり，この勝利がアジア人の意識の底流に与えた影響は決して消えることはなかった。……日本が西欧勢力に対抗する新勢力として台頭したことは，日本のアジア諸国への距離をますます深めていったのである。それはすべての虐げられた民衆に，新しい夢を与える歴史的な夜明けだったのである。私は今でも，日露戦争と，日本が勝利を得たことを聞いたときの感動を想い起こすことができる。私は当時，小学校に通う幼い少年にすぎなかったが，そのころ流行した戦争ごっこで，日本側になろうとして争ったりしたものだ。このことは，日本が勝つ前までは想像もできぬことだった。ビルマ人は英国の統治下に入って初めてアジアの一国民の偉大さについて聞いたのである。それはわれわれに新しい誇りを与えてくれた。歴史的にみれば，日本の勝利は，アジアの目覚めの発端，またはその発端の出発点とも呼べるものであった」

《日露戦争前後におけるアメリカ世論の変化》
◆アメリカ『ニューヨーク・サン』紙（1905 年 5 月 30 日）
「日本海海戦は世界の海戦史上に類例をみない偉業なりといっても過言ではない。日本が欧州諸国に門戸を開いたのは五十年前であったが，その制度文物の模範を西洋に採ってからはわずか二十五年しか経っていない。しかも海軍を創設したのはわずかに十数年前である。しかるに日本はすでに大陸で大陸軍国に勝利し，さらに今日，日本海海戦に勝利して一挙に世界に卓越した地位を確立した。…（中略）…もし日本海軍がさらに増強されるならば，英国海軍といえども凌駕されるのは遠くないであろう。……日本海海戦は二十世紀における文明世界の態勢を一変した」
◆アメリカ人海軍評論家アルフレッド・マハンの論説「門戸開放政策」（1909 年）
「日本は最近では中国や満州の市場に関心を強め，国務長官の満州鉄道中立化提案を拒否し，日露協商を締結するなど独占欲にまみれている。また，ハワイ（1898 年アメリカが併合）の労働者の大半が日本人で占められ，太平洋沿岸は日本人移民の希望の的となっている。太平洋沿岸部は人口も少なく，戦争となってもロッキー山脈が増援を拒んでおり，米国の三大海岸（大西洋岸・メキシコ湾岸・太平洋岸）の中で太平洋岸が比較にならないほど危険にさらされている。太平洋に面した大海軍国は日米しかなく，日米が直接対決する可能性が一段と高まった」

第６時 日露戦争後における日本の勢力拡大に着目し、日清・日露両戦争（明治日本がとった進路）がもたらした歴史的意義について評価する。
〈本時の問い〉日本の帝国主義化はアジアに何をもたらしたか

《「見方・考え方」を働かせる思考（考察・構想）と教材》
第６時では、前時で学習した「日露戦争に対する各国の反応やアジア諸国に与えた影響」を踏まえ、日露戦争後における日本の勢力拡大や植民地獲得の過程について把握し、日清・日露両戦争が国内外にもたらした変化及び影響と、その歴史的意義について評価させることをねらいとした。
日本は日露戦争直後から日韓議定書及び３次にわたる日韓協約を結び、段階的に韓国の外交権・内政権を奪うとともに、アメリカとは桂・タフト協定、イギリスとは第２次日英同盟協約を結ぶことにより日本の韓国保護化を承認させてきた。これに対し韓国民衆は反日闘争（義兵運動）を激化させ、1909 年に初代統監伊藤博文が暗殺される事件が起こると、翌年に日本は韓国を併合した。一方満州では関東都督府をおいて軍事・行政を管理するとともに満鉄を設立するなど、南満州権益の確保にも努めた。これらの国際環境の変化と日本の植民地支配について生徒たちは「レポート」を作成することによって把握している。
前時で学習した「日露戦争に対する各国の反応やアジア諸国に与えた影響」及び本時で学習した国際環境の変化を踏まえ、生徒たちは改めて日露戦争について振り返り、その歴史的意義について評価するとともに、単元の基軸となる問いである「日本の帝国主義化を支持するか」について改めて考えていった。

◇「日本史Ａ」リフレクションシート　　月　　日（　　）

● 日露戦争はアジアに何をもたらしたか。各国の反応（新聞記事）なども参考にこれまでの学習を踏まえて書きなさい。また、日本の帝国主義化に賛成か反対か。あなたが考えたことも書きなさい。

【生徒の回答「日本の帝国主義を支持するか」（選択・判断③）※一部】

〈支持する意見〉

・日露戦争の結果でアジアのナショナリズムが起きたことや、賠償金のことは他の外国も評価していたが、日本の満州や韓国に対する行動が良い風には見られていなかった。帝国主義化はそうせざるを得なかったと思う（他の列強に支配されないように）。

・日本は西欧勢力に対抗する新たな勢力だということ、もっと日本のことを学び模範にしようという国がでてくるきっかけとなった。アジア諸国には希望の光となったと思う。日本の帝国主義化には賛成である。先進化するためには資源や安価な労働力が必要となってくると思うし、日本は小さい国だから自国では補いきれないと思う。

・アジアには「自分達も他国と協力すれば平等に渡り合える」と思わせ、独立に向けて動くきっかけを与えた。各国も大国にアジアの小国が勝ったことをほめたたえた。帝国主義化は賛成。日本は国土が他国に比べ少ないので、植民地によってカバーしていかないと列強に遅れてしまうから。

・アジア諸国の国々は日本に留学生を多く送り、日本の進んだ文化を学ばせようとした。欧米諸国は日本を認めた一方、欧米との直接対決する可能性が高まった。日本の帝国主義化に賛成。日本がアジアの中心となり、アジアの繁栄、欧米にも負けないアジアづくりが必要だ。

〈支持しない意見〉

・日露戦争に日本が勝ったことにより、アジアのヨーロッパに植民地とされていた国々は次々と植民地脱退を目指して動き始めた。日本の帝国主義化については反対である。なぜなら、ロシアに勝ったことで今まで以上に帝国主義化が強まったことにより、あらゆる国から反対されるようになったと思うから。

・ベトナムやインドなどの被抑圧民族に自由を得ることの夢をもたせた。アメリカでは日本の強さを認め、ちゃんとした国として考えてもらえるようになった。ドイツはロシアが無謀な戦争を続けるなら他の国もロシアに資金を供給しなくなるというように日本側についた。だが日本の帝国主義化に反対。なぜならその後植民地となった国々に恨まれて、日本がよく思われない。そして他の植民地をねらってくる国と敵対してしまうかもしれないから。

・日本の帝国主義化に反対だ。しかし、日本の勝利で欧米列強の支配下にあった諸民族を刺激して民族の自覚を高められたのはよかった。しかし日露戦争では 17 億もの軍事費や大幅な増税に加え犠牲者が多く、国民を苦しめただけだと思う。ロシアでも血の日曜日事件などもあり、ロシアと日本両国とも良い事はなかったと思う。

・中国は辛亥革命を起こした孫文が日本で中国革命同盟会を結成。インドでも初代首相になったネルーは自叙伝に対馬の海戦で日本が大勝利を収めた事が記されていることから、この年を境に反英運動が変化し、大衆運動の様相を呈したそうだ。帝国主義化には反対である。他国の領土を植民地化することはよくないと思うし、謝罪や賠償を何度も要求されたことを考えると、植民地化にするべきではないと思った。